

平成 20 年度 文部科学省
「質の高い大学教育推進プログラム（教育 GP）」採択事業

平成 20・21 年度
「女性医療リーダー育成をめざす全学横断教育」報告書

東京女子医科大学

はじめに

本学創設者吉岡彌生学頭は、困難を乗り越え、日本で27人目の女性医師となった。その後、唯一女性を受け入れていた済生学舎が、門戸を閉ざしたため、「女性医師を求める人」と「医学を収め社会に尽くしたいという意志を持ち学ぼうとする女性」を助けることを切望し東京女医学校を創設された。

医療人は、学問としての医学・看護学を学ぶが、実践する相手は人であり、実践過程を通し「ある人の人生」に関わる。その医療人の「関わり方」がその人生に影響を与えうる。良い医療実践に際しては、医学・看護の知識のみならず、医療人個人の豊かな人間性が求められる。第一段階として、生活実態を知る女性が医療チームに参加することは重要である。また、医学は益々高度化・複雑化し、よりよいチーム医療実践が求められる。チームではリーダーが必要である。人格の育成には、遺伝的・心理的・環境的要因の影響を受ける。しかし、自らが主体性、「選択の自由」を持って行動する事、人として前向きな考えを選択する事により更に充実した自己実現が可能となる。主体性を持つという事は、責任Responsibilityをとるということである。責任はResponse：反応とAbility：能力という二つの言葉からなる。主体性のある人は、状況や環境、心理学的条件づけのせいにしようとはせず、自らの選択により行動し責任をとる。困難に直面した時にも動ぜず前向きな態度をとれば、周囲を動かすことが可能である。極端な例を挙げれば、「苦しい闘病生活を過ごしながらも、立派な態度を保ち、信じ難いほど最後の最後まで他人を助け、思いやりを示し、奉仕を続けた方」に遭遇した時に、「その人の素晴らしい態度、勇気」に深く感動し大きな動機づけを受けるよう困難にあって周りを前向きに動かす力：リーダーシップをもつ医療人を育成できれば、彼女達は、生涯医療人の姿勢を持ち、世の人々の健康に貢献することが可能と考える。

平成20年度の、質の高い大学教育推進プログラム（教育GP：教育の質の向上につながる教育取組の中から特に優れた取組）の選定件数は計148件、選定率は15.8%という。本学の「女性医療リーダー育成をめざす全学横断教育」が平成20～22年度の取組として認められたことは感謝に耐えない。

本取組では女性医療人が医療の様々な分野において周囲を感動させながらリーダーシップを発揮できるための人間形成と専門職意識形成を目指す。よりよいチーム医療が強く求められる中、異なる職種の視点を、まだ新鮮で多感な時期に学び感じ取ることは重要であり、医学部と看護学部が共同して行う横断教育と各学部の教育から構成している。平成20年度は準備が主で、同21年度から本格的活動を開始した。本報告は平成20年-21年度の活動成果のまとめである。些かの成果を上げることができた。今後も各位の一層の御支援、御指導頂きながら、本取組みを推進していくことが出来れば幸甚である。

東京女子医科大学

医 学 部 長 大澤真木子

看護学部長 久米美代子

目 次

はじめに

医 学 部 長 大澤 真木子
看護学部長 久米 美代子

第 1 章 本取り組みの概要と平成 20・21 年度の経過・・・・・・・・・・ 1

医学教育学 吉岡俊正

第 2 章 医学部の取り組み

人間関係教育委員長 齋藤加代子

1. ロールモデル育成教育・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 4
 - 1-1 実習名：女性医師ロールモデル実習
 - 1-2 実習名：先輩と語る
2. キャリアビジョン育成教育・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 8
 - 2-1 実習名：院内奉仕学習実習
 - 2-2 実習名：乳幼児施設実習、院内保育所実習
 - 2-3 実習名：高齢者施設実習
3. 協働を見据えた自己のキャリア構築・・・・・・・・・・ 14
 - 3-1 実習名：チーム医療入門実習
 - 3-2 実習名：看護の医療対話実習

第 3 章 医学部・看護学部協働教育の取り組み

1. キャリア発達論Ⅰ 医学部・看護学部協働教育 ・・・・・・ 19
 - 1-1 看護技術演習
 - 1-2 ミニ・チュートリアル
2. 医学部・看護学部協働教育（合同カンファレンス）・・・・・・ 24
3. 医学部・看護学部合同解剖慰霊祭実習 ・・・・・・ 29
 - ー亡くなられた方から学ぶ医学・看護学ー

第4章 看護学部取り組み

1. GP 委員会取り組み経過・・・・・・・・・・・・・・38
 - 1-1 看護学部の取り組み経過
 - 1-2 平成 20 年度の取り組み
 - 1-3 平成 21 年度の取り組み
2. キャリア発達論Ⅰ キャリアイメージング教育・・・・・・・・53
3. キャリア発達論Ⅰ 食のフォーラムと調理実習・・・・・・・・54
 - 3-1 栄養士による食のフォーラム
 - 3-2 栄養士による調理実習
4. キャリア発達論Ⅰ キャリア発達問題解決学習（CDPBL：Career Development Problem-based Learning）の取り組み・・・・57
5. 看護学部キャリアセミナー・・・・・・・・・・・・・・84
 - 5-1 平成 20 年度 看護学部キャリアセミナー
 - 5-2 平成 21 年度 看護学部キャリアセミナー

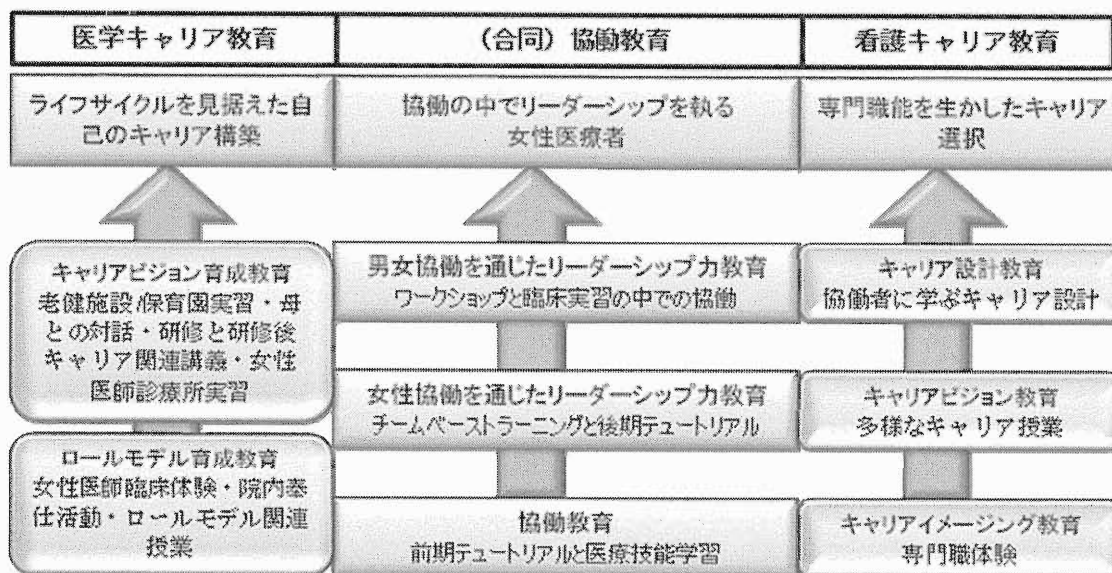
第 1 章 本取り組みの概要と経過

本取り組みの概要と平成 20－21 年度の経過

1. 概要

本取組は、職種間横断・協働教育およびキャリア・ライフサイクル教育を通じて大学建学精神に基づく自立・独立した女性医療者育成を目指す学部横断教育を開発し実施する教育取組である。本取組では学生が医療人としてのキャリアおよび女性のライフサイクルを知り、自己のキャリアを考えながら医・看護で組織社会を主導する意志を醸成する教育を各学部で行い、医療チームの中で協働しながらそれぞれの役割でリーダーシップを執る力を育成する両学部合同教育を行う。体験的・能動的学習を横断教育の中に取り入れ、自己のライフサイクルと生涯学習を継続する専門職者としての問題解決能力を育成する。自己変容をアウトカムとして評価することにより、教育効果の評価を行う。

取組の背景としては就業可能な年齢層が減少する現代での女性医療者の増加がある。女性の勤労支援が社会に求められる一方、女性医療者自身が生涯社会に貢献する意識をもち、かつ専門職として組織・社会を主導する能力が求められている。日本で唯一の女性のための医科大学である本学は、自立独立した医療者を育成することを検眼の精神として 100 年を超える教育を行ってきた。今回卒業した医療者が女性としての医療能力を発揮し、医療を通じて社会を先導できることが本事業の目的である。



取組の全体は、各学部のキャリア教育と両学部共同の学部横断協働・リーダーシップ教育を構築することである（図）。医師および看護師それぞれのキャリアを、自己を知り、キャリアを知り、ロールモデルを持ち、自分のキャリア像を構築し、キャリア達成のための問題解決能力を育成することがキャリア教育である。職種間連携教育は、両学部学生時には他大学の学生も交え、医療を考え、連携と連携における問題解決を学ぶ教育を構築する。また、連携の中でそれぞれの立場でのリーダーシップを学び、最終的には組織・社会を先

導する意志と能力を育成することを目指す。

2. 経過

平成 20 年度は取組初年度であり、実行期間が短かった。その中で医学部・看護学部個々の教育開発ならびに学部横断教育の準備が行われた。横断教育を行う組織構築については、横断教育委員会を設置し活動計画を立てた。現在の両学部合同で行っている教育に、さらに協働の視点での教育内容を加味することなどで、本事業の目的である協働教育の充実を行った。横断教育委員会として両学部の教員が参加する faculty development を企画し、3 月 19 日にチュートリアル教育セミナーを開催した。協働教育としてはチーム医療教育の導入を行い効果を検討した。またリーダーシップ、臨床判断教育のための教育方法としてチームベーストラニングトライアルを 1 月に実施した。臨床判断の合意形成などを教育内容に盛り込んだ。チームベーストラニングはリーダーシップ、判断力、問題解決能力開発教育として有効と考えられた。

両学部ではキャリア教育の準備が進められた。看護学部では本取組について全学部教員職員に 2 回説明会を実施した。さらに看護学部キャリアセミナーを平成 21 年 3 月 12 日に開催した。様々な資格を生かし、多方面で活躍している本学部卒業生に講演を依頼し現在の自己のキャリアについて語ってもらった後、卒業生と在校生によるグループワークを行った。平成 21 年度第 1 学年から導入する 4 学年合同教育によるリーダーシップ、フォロアーシップ育成のためのキャリア発達 PBL(CDPBL)教育について、グループ学習のテーマの選定を行い、グループ学習を円滑に進めるためのガイド（学生用・教員用）と評価表を作成した。学生の学習記録方法としては、ポートフォリオを用い、その使用方法について検討した。さらに各系の領域を超えた教員が担当するため説明会を開催した。

平成 21 年度には、組織的な学部横断教育が開始された。従来の 1 年生での合同医療技術・チュートリアル学習に加えて、解剖慰霊祭を両学部合同で行い事前事後に疾患や死について両学部学生が考える合同授業、医学部 5 年・看護学部 4 年（21 年度は一部の学生）と早稲田大学人間科学部学生との生命倫理合同ワークショップ、医学部 5 年・看護学部 3 年の合同臨床カンファレンスなどが行われた。生命倫理ワークショップは、平成 22 年度には生命倫理ワークショップに看護学部 4 年全員が加わることになり従来のワークショップ形式ではなくチームベーストラニング形式にすることなど、従来の教育を協働教育に偏向した際にも、教育方法を大幅に変更する必要があることが分かった。

医学部では医学部 3 年地域医療学習カリキュラムを再評価し、キャリア教育を更に充実することを検討した。平成 21 年度に行う地域医療学習では、指導医師（地域医療実践の女性医師）にキャリア教育についてのオリエンテーションを行い、医療の見学とともに医師のキャリアを意識し学ぶ場とした。女性医師のライフスタイルについて強い意識を持った学生がいることが報告された。本取組は卒後のキャリア・ライフサイクルを目標としてい

るので、教育効果は現れにくいと考えられる。しかし、これまでの取組で、教育の質的変化、教員の意識の変革、学生の行動変容などのアウトカムが見えている。

第2章 医学部の取り組み

1. ロールモデル育成教育

(女性医師ロールモデル実習、3年)、(院内奉仕活動、1年)

1-1 実習名：女性医師ロールモデル実習

1) 目的

地域医療の現場で活躍中の女性医師のもとで夏季休暇期間中に見学実習を行う。医療に加え、保険サービス、在宅ケア、リハビリテーション、福祉、介護サービスなどを含んだ全人的医療を実践する指導医の下で、地域に根ざした医療対話を体験することによって、より良い医療対話に気付く契機とする。

看護師、検査技師、薬剤師、事務スタッフ等のメディカルスタッフとのコミュニケーションの取り方やリーダーシップ、女性医師のキャリアやライフサイクルについても併せて気付きを得る契機とする。女性医師のロールモデルを持ち最終的には組織・社会を先導する意志と能力を育成することを目指す。

2) 方法

対象は3年生。実施までの準備としては、2年生の春休み前にショートガイダンスを実施し、次年度の夏に見学したい医療機関があれば下調べなどをするよう伝える。4月下旬に実習の目的、過去の実績のほかに、具体的な依頼の仕方（電話対応マナー）、実習時の態度、実習終了後の礼状送付なども含めたガイダンス講義を行う。その後、学生が自主的に実習先を選び、事前グループディスカッションにおいて選定の妥当性をグループ担当医が判断する。続いて学生が実習先に見学の依頼をし、内諾を得る。

大学から学長名で正式な実習依頼を送付し、夏休み期間中の2～5日の間、見学実習を行う。

実習終了後に、実習内容をレポート形式で提出するとともに、事後グループディスカッションで互いの気付きを共有する。10月に、代表者の実習体験のプレゼンテーションおよび、討論を含めた学年全体の総括講義を行う。

既に第1・2学年で人間関係教育入門として、生命倫理や人の心理と行動に関する講義、「対話と振舞」「高齢者との対話」、「乳幼児との対話」、「医療対話入門」、「看護の医療対話（看護実習）」、「自己との対話」、「チーム医療実践（患者体験学習）」の実習を履修している。これまでの学びの振り返りによって未到達である部分を自己認識し、本実習では新たな課題に取り組む。

3) 実施

104名全員が計画通り実習を終了できた。期間は2日から5日、実習先は全国16都道府県、計75医療機関であった（2009年度実績）。

4) 評価・効果

評価は、①ガイダンス講義への出欠、②事前事後のグループ担任による評価、③指導医による依頼方法、実習中の態度、実習後の態度についての評価、④レポートの提出、⑤総括講義への出欠ならびに発表の各項目について行った。すなわち、一人の学生を複数の教員/指導医が多方向から評価している。評価において問題のあった学生は実習責任者が面談を行い、問題解決の手助けを行う。今年度は該当者 3 名について面談を実施した。具体的には実習中の態度の問題、催促に応じないレポートの未提出などであった。

指導医による評価では、本実習の意義があると答えた者の割合は 96%、次年度も実習を引き受けると答えた割合は 91%であった。学生へのアンケートで、意義のある実習であると答えた学生は 100%、実習の成果が満足であったと答えた学生の割合は 98%であった (2009 年度実績)。

5) 取組の特徴および展開上の問題の整理

本実習の取組の特徴は、大学病院では見学しえない地域医療の現場に敢えて早期に接する事により、学生が医師と患者の間間的な立場として医療現場でのコミュニケーションに関わる様々な気付きが得られる事である。女性の勤労支援が社会に求められる一方、女性医療者自身が生涯社会に貢献する意識をもち、かつ専門職として組織・社会を主導する能力の開発のためには早期からのロールモデルの存在が大きなモチベーションとなる。女性医師のライフサイクルやキャリアに関する課題への気付きも本実習の重要なテーマである。また、正規のカリキュラムではないが、学生は本実習の見学後に女性医師から仕事と家事育児」とのバランスのとり方、周囲の支えの必要性などについて具体的な話を伺うことも多く、生涯を通じて医療人として社会に貢献するプロフェッショナリティーについても学んでいる。

事前事後のグループディスカッションでは小グループで積極的に発言を引き出し、問題がある学生は委員が面談を行うなど、よりよい医療人を育成すべく学生に応じたきめ細やかな教育を実践している。

学生にとって入学後初めての外部施設での実習であり、しかも指導医との連絡を自分自身で依頼することなどから、本実習を通じて学生の性格やコンプライアンスが浮かび上がってくる。知識評価で測ることができない医療人としての資質についても評価が可能である点が特筆に値すると言える。以上のように、本実習は極めて多方面からの学びが期待できる本学にとって極めて意義深い実習と考えられる。

6) 担当者

岩崎直子 (第 3 内科学)、小島原典子 (衛生学公衆衛生学Ⅱ)
佐藤梓 (化学)、中村裕子 (化学)、野田泰一 (生物学)

1-2 実習名：先輩と語る

1) 目的

新入生のオリエンテーションの時間に、本学で活躍中の女性医師と少人数で懇談することにより、これからの大学生活や卒業後の医師としての生活に対するイメージを広げることが目的とする。将来の自分のロールモデルとしての女性医師から「女性としての生き方と医師としての生き方をどのように融合していくのか」「女性医師としてのライフスタイル」「仕事に対する考え方」などのテーマについて実際の体験談を聞き、医学生としての心構えを強くする助けとする。

2) 方法

対象は新入生。学生グループ6-7名に対し、現在医療の中心となって活躍中の女性医師1名がつき、懇談を行う。まず、医師の側から女性医師としての生き方、ライフスタイル、これまでの道のりなど学生に語る。続いて学生生活への期待や悩み、将来に対する不安、希望などをについて、学生が質問し教員がアドバイスを与えるとともに、教員を中心として学生同士での意見交換を行う。

3) 実施

新入生 112 名を 18 グループに分け、女性医師 18 名が担当して 2 時間実施した（2009 年度）。

4) 評価・効果

新入生を対象としているので、学生に対する評価は行わないが、実施後ポストアンケートを実施し、このプログラムを通して学んだ事、感じた事を自由に記述させている。その分析によれば、このプログラムは、希望を持って本学に入学した新入生が、自己のキャリアデザインを考える上での最初の一步として、貴重な体験になっている事が伺われる。学生は、ロールモデルとしての女性医師のストーリーを聞くことにより、自分達の未来の姿を思い描くことが出来、今後の学びへのモチベーションが高まっていることが示されている。以下に学生の感想のうち、代表的な例を挙げる。

「実際に医療の現場で働く女性医師と直接お話をする機会を持てたことは自分の将来を考える上でもとても参考になった。もしかたこのような会が開かれるならまた参加したい。」「一生涯、結婚・出産・育児などすることがあったとしても、医療に身を献げるという意識を常に持ちたいと思った。」「一年の時から色々なことに興味を持って勉強することが大切だと思った。」「自分の将来について様々なイメージが膨らんだ。」

5) 取組の特徴

本実習では、大学に入学したてで様々な不安を抱える学生に病院に勤務する女性医師のキ

キャリアを示す事により、将来に対する希望と、自らのキャリアデザインを描くきっかけを与えることに成功した。また、これからの学生生活への希望や悩みを教員や学生同士で話し合うことによって、同じ大学に属する先輩医師とのつながりを感じ、仲間との連帯感も生まれてくるという効果が期待できる。鉄は熱いうちに打て、といわれるように、新入生の大学における第1歩の時点での新鮮な経験は重要で、これが本実習の特徴であると言える。この特徴により、新入生には医学生としての心構えがより強く意識され、大学で学ぶことへの意欲を高めるのに役立っている

2. キャリアビジョン育成教育

(院内奉仕学習実習、1年)、(乳幼児施設実習、院内保育所実習、1年)、(高齢者施設実習、1年)

2-1 実習名：院内奉仕学習実習

1) 目的

医学を学ぶ者として、社会に奉仕し貢献する姿勢を身につけ、実践する事を目的とする。社会への奉仕、貢献は様々な形で行う事が可能であるが、将来医師になる者として、病院ボランティア活動を通して以下の事を学ぶ。

- 医学生としての社会的立場・役割について考え社会における奉仕と貢献の重要性を理解する。
- 対人援助の基本的考え方と方法を身につける。
- 奉仕できる喜びを感じ、主体的、自発的に活動する姿勢を身につける。
- 病院スタッフや先輩ボランティアと協力して活動する事を通し、社会における協調と連帯のあり方を学ぶ。

2) 方法

1年次年度当初に、講義、および東京女子医大病院ボランティアのオリエンテーションにより事前学習を行う。これにより、奉仕活動の意義、心構えを理解し、適切な態度、服装、技術を学ぶ。次に、先輩ボランティアの指導を受けながら院内を見学し、院内の構造、患者、職員の動きなどの実際を理解して奉仕活動のあり方、可能性を考えておく。以降は病棟、外来センター、院内保育所、小児科患者の会のいずれかで、年間を通して5回の奉仕活動を実施し、すべての実習を終了した後、レポートを作成して省察を行う。

3) 実施

対象は1年次生 112名。年間を通して、病棟、外来センター、院内保育所、小児科患者の会のいずれかで5回の奉仕活動を実施した。各学生の実習場所の選択と日程はwebを活用する事により調整し、全員の学生の実習進行状況を担当者が常に把握し、実習回数の不足が予想される場合など適宜指導を行った(2009)。

4) 評価・効果

学生に対する評価は、レポートの提出とボランティアコーディネーターによる外部評価に依った。特に学生の基本的に守るべき態度振舞(時間厳守、ドレスコード、実習中の態度、取組)については、現場の声を重視して評価を行い、学生へフィードバックした。ポ

ストアンケートにより学生の実習に対する意識調査を行った。

本実習は、将来医師となり社会に奉仕し貢献することが義務づけられている立場を理解し、奉仕する心を育てることが目的であり、この実習を経験する事により、学生の中には医師として社会に尽くすという意識の芽が育ったと考えられた。奉仕活動では何を、いつ、どのように行えばよいかを、常に考え、それを素早く行動に移さなければならない。現在、「指示待ち人間」と言われる学生が多く存在するが、病院ボランティアは学生の意識の改革とそこからの脱却を後押しし、自ら進んで社会に奉仕する姿勢を身につけるのに大きな効果を上げると考えている。

5) 取組の特徴

社会に奉仕する活動は、現在、中学、高校においても学生は経験しているが、病院ボランティアの経験がある学生は少ない。本取組は1年次学生全員が、病院内という現場の第一線での活動により、奉仕活動の意義、適切な態度、技術を学ぶという画期的ともいえる取組である。同時に、院内の構造、患者、職員の動きを知ることでもある。ボランティアコーディネーター、医療の分野で奉仕活動を行っている一般のボランティアの方々などがおられ、これらの病院関係者が学生への教育の一端を担っていることも重要で、教育担当者との緊密な連携が本取組の大きな特徴と言える。また、学生が自身で web 上で実習を行う日時の予約を行うなど web が十分に活用されている。

6) 展開上の問題点の整理

学生が現場へ直接行って実習をおこなうことから、服装、集合時間などについては教員が事前チェックはできない。時により問題点のある学生もある。そのため、現場での指導者であるボランティアコーディネータと教員との連携は不可欠である。また、実習日時の予約を web 上で学生が自主的に行う事になっているため、モチベーションの低い学生が年間の後半に実習をのばす傾向が強く、春期休暇の最終まで実習が終了しない場合があることが問題点としてあげられる。

2-2 実習名：乳幼児施設実習、院内保育所実習

1) 目的

医学生は将来医師となったときには年齢、職業、生活環境などが異なるどんな相手とでもコミュニケーションをとり、信頼を得ていかねばならない。乳幼児施設で乳幼児と接することにより、初めて出会った乳幼児との対話のしかたについて実際の体験から学ぶことを目的とする。乳幼児に対し、温かい心と共感を持って接し、言語的、非言語的コミュニケーションを駆使して対話によって相手の気持ちを理解し、自分の気持ちを伝えることを学ぶ。また、同時に乳幼児の発達段階、心理、行動、生活習慣についても理解を深める事、学外の施設において実習することにより、社会における適切な態度、振る舞いを学ぶ事、女性医師としてのライフサイクルの特徴を考慮する事も目的とする。

2) 方法

実習開始以前に 6、7 名のグループで担当教員と面接し、実習の意義、目的について討論する。また各人それぞれ独自の行動目標を設定する。実習は学外乳幼児施設にて 2 日間行い、実習終了後 1 週間以内に、行動目標に対する達成度の評価を含め、所定の様式で報告書を作成し提出する。さらにグループ面接を行い、実習に関する省察を行い、意見交換によりそれぞれの体験を共有する。また、他者からの評価を受け止め、自己評価と併せて総括を行う。

3) 実施

対象は 1 年生。学外乳幼児施設実習は、都内の 12 の施設で 112 名中高齢者施設実習との選択制で半数の 56 名が実習を行った。院内保育所実習は病棟、外来における奉仕学習との選択制であったが 60 名の学生が実習を行った(2009 年度)。

4) 評価・効果

学生に対する評価は、レポートの提出と実習後のグループ面談における取組により行い、本実習に関する学生の評価はポストアンケートを実施する事により行った。

本実習実施による種々の効果のうち、医学生のキャリアビジョン育成に関する効果にしばって以下に述べる。

本実習は、母として、医療者としてのライフサイクルのイメージ作りに貢献している。本実習を通し、キャリアと育児の両立を目指している親子(主に母子)およびその勤労支援体制に接することができた。後者の院内保育所実習では、親の大半が医師および看護師のため、子を持つ医療者ならではの問題解決法・問題意識・喜怒哀楽、そして、医療者を対象とした勤労支援体制特有のあり方に触れることが可能であった。いっぽうで、医療者と一括りにはできず、職種、立場、ライフサイクル、家族構成等によっても、育児と仕事の

両立のあり方は多様であるということも感じ取ることができた。

学生が書いたレポートから、学生の気付きをいくつか紹介する。「保護者が安心して子を託し働き続ける姿を見、育児と仕事の両立に対して経験もしていないのに漠然とした不安を抱いていたが、なんとかできそうだった」「お迎えのときの母親の笑顔を見、子どもの存在から働く元気を得られることが分かった。育児は仕事の邪魔になるばかりではないという実感を得た」「集団の中で社交性を身につけ、保育士さんにたくさん遊んでもらい、明るくたくましく育っている子どもたちに接したことで、保育園に対する偏見が無くなったし、保育園で育つことのメリットにも気付けた。将来、保育園を利用してみたいと思った」。

5) 取組の特徴

医学部 1 年生は、身近に育児とキャリアの両立を試みているロールモデルを見出しづらく、またサポートシステムに関する情報が無いために、育児とキャリアの両立に漠然とした不安を抱き、保育所に子どもを預け働き続けることに否定的なイメージを有している場合が少なくない。しかし、両実習を通し、医学部 1 年生は、育児とキャリアの両立に対する漠然とした不安が軽減され、明るく柔軟なイメージを持てるようになるようである。特に、院内保育所における実習は、親の大半が医師および看護師のため、将来の自分の姿を重ね合わせることが容易で、キャリアの形成に希望を持てるという効果が見いだされた。

2-3 実習名：高齢者施設実習

1) 目的

高齢者施設において車いすや食事の介助や利用者との対話を通して、高齢者の心身の状態と施設の状況を知ることが目的としている。高齢者の生活習慣、からだと心の健康状態、自立度、知的機能などへの理解を深め、高齢者の持つ能力と、その個人差を知る。また高齢者とのコミュニケーションをはかり、その場に相応しい態度や振舞を実践する事ができるようにする事を目的とする。さらに施設における介護者の介護の様子を観察し、スタッフとの良好な関係を通して高齢者介護への理解を深め、医療と福祉との連携についても学び、将来の医療人として生きた知識を養う。

2) 方法

実習開始以前に6、7名のグループで担当教員と面接し、実習の意義、目的について討論する。また各人それぞれ独自の行動目標を設定する。実習は学外高齢者施設（特別養護老人ホーム、老健施設）にて2日間行い、実習終了後1週間以内に、行動目標に対する達成度の評価を含め、所定の様式で報告書を作成し提出する。さらにグループ面接を行い、実習に関する省察を行い、意見交換によりそれぞれの体験を共有する。また、他者からの評価を受け止め、自己評価と併せて総括を行う。

3) 実施

対象は1年生。都内および近郊の介護老人保健施設、特別養護老人ホーム10施設において乳幼児施設実習との選択制で112名中半数の56名が実習を行った。（2009年度）

4) 評価・効果

学生に対する評価は、レポートの提出と実習後のグループ面談における取組により行い、本実習に関する学生の評価はポストアンケートを実施する事により行った。提出された学生レポートからは、学生の様々な学びの効果が読み取れた。以下に例を挙げる。「装具による高齢者体験、実際の介助、そして高齢者からお話を直接伺うことで、加齢による心身の変化が想像できるようになった。」、「医師として接するときにも、高齢者には配慮が必要だとわかった。」、「施設の充実に協力しなければならないと思った。」、「認知症の方と身近で接することができ、頭の中だけでなく現実的な経験となり、意義があった。考え方についてもっとキャパシティを広げたいと考え、学ぶ事の重要さを感じた。」、「高齢者と接する機会を持てたことはもちろん、介護士の方々の仕事も知ることが出来てとてもよかった。」、「今までの高齢者に関する固定観念のようなものを払拭することができ、とても有意義な実習となった。」。

5) 取組の特徴

学生たちは日頃の生活の中で高齢者と接する機会が少ないので、将来医師として高齢者の患者と接する時のイメージを持つことが難しい環境にいる。そうした点を補うためには、実際に体験から学ぶ事が必要で、本実習はその機会を与えているといえる。また、高齢者の施設、およびそこで働く介護福祉の関係者と医師との関わりに関しても考える第一歩となっている。

6) 展開上の問題点の整理

乳幼児施設実習と高齢者施設実習はいずれかの選択制であり、本来であれば両方の実習を実施する事がのぞましいが、時間的制約と人数に対する受け入れ施設確保の関係からチーム医療入門実習との裏表実習とし、いずれかの施設の選択制で行っている。高校までの体験実習の有無、本人の希望などについて事前アンケートを実施し、なるべくこれまでに経験した事のない施設での実習が行えるよう配慮している。

3. 協働を見据えた自己のキャリア構築

(チーム医療入門実習、1年)、(看護の医療対話実習、1年)

3-1 実習名：チーム医療入門実習

1) 目的

新宿区河田町で学ぶ医学部1年生が、看護学部1年生のいる大東キャンパス（掛川市大東町）を訪ね、お互いに知り合い、自分たちが学習したことをお互いに教え合い体験し合って友好を深め、将来円滑なチーム医療を行うための初歩を学ぶことを目的とする。

2) 方法

医学部1年生約111名が4つのグループ（27～28名）に分かれ、4回に分けて看護学部1年生のいる静岡県掛川市に行き1泊2日の実習を行った。

3) 実施

最初の第1グループは9月1日（火）に出発、最後の第4グループは9月4日（金）に出発、9月5日（土）に帰京した。各日とも昼過ぎに医学部生が大東に到着後、まず、看護学部生と一緒にグループになり、グループごとに昼食を食べながら自己紹介をし合った。昼食後、看護学部生は、医学部生に手洗いとシーツ交換などの実技を教え、医学部生は看護学部生に自分たちが週2日行っているチュートリアルを紹介、一緒に課題についてそれぞれ9人ずつほどのグループでディスカッションした。最後に全体でミーティングをして合同実習が終わった。医学部ではこの実習を「チーム医療入門実習」と呼び、4年次の「チーム医療の基礎」実習まで継続するいくつかのチーム医療教育関連の実習の第一歩として位置づけている。医学生は2日目、この実習のもう一つの目的であるハンディキャップ体験実習を大東キャンパスで行い帰途に着いた。

同時期に行われる、乳幼児施設・高齢者施設実習と本実習の3実習のための事前指導として、グループ（5～7名）ごとにグループ担当の教員とのグループ面談を行った。実習の目的について確認、各自の達成目標を考えるように指導した。また、実習開始前日にオリエンテーションを行った。

上記3実習の事後指導として、学生が実習レポート（A4で2～3枚程度）提出後、グループ担当の教員がコメントを書き、グループ面談を実施、レポートを返ししながら目標達成度についてそれぞれ述べ、実習を振り返って体験を共有し、考察を深めた。

4) 評価・効果

医学部生のレポートでの感想で多かったのは、看護体験実習やチュートリアルを通して、お互いの考え方の違いに驚き考えさせられたというものだった。医学部生は、看護体験実

習で、看護学部生がシーツ交換のときにきめ細かく声かけをしているのに驚き、また、自分たちが理論や知識のみで実技はまだ習っていないのに看護学部生がすでに実技を習っているのに驚いていた。チュートリアルでのディスカッションでは、自分たちが患者さんの病気についてまず関心を持って科学的に解決しようとするのに対して、看護学部生が患者さんの心の面に関心を持って、心に寄り添ってサポートしようとしているのに驚いていた。

この実習の後には、本実習で初めて看護学部生と交流し、親しくなり、同学年の学生として、また同じ学校の学生としてお互いに頑張っていこうという雰囲気が生まれている。多くの学生が上級生でも同様の実習があればよいと願うようになる。

5) 取組の特徴

学生にとってこの実習は、医療人でも他の職種を目指す人との初めての出会いを体験する機会であり、これから始まる協働教育の第一歩として有用な実習である。他職種の人たちの理解するためには、その職種を目指す人たちと学生のうちから触れ合い交流する機会がとれるのが大切なことであり、本実習は医学部では将来の円滑なチーム医療、そしてそのようなチーム医療を行うリーダー育成のためには欠かせない実習となっている。

6) 展開上の問題の整理

医学部・看護学部合同の実習であるため、医学部・看護学部の教員間ばかりでなく、両学部の学務間の連携も円滑に取ることが大切になる。今年度は連絡を密に取ったため、かなり順調であった。

21 年度 9 月は、インフルエンザがまだ流行しており、医学部で 1 名、帰京後に新型インフルエンザ罹患が判明した学生がいた。看護学部の迅速な対応で、実習が継続できた。

今後も、台風・地震など不測の事態の場合のマニュアルをしっかりとておく必要がある。

7) 実施までの準備

春には看護学部の教員との打ち合わせを持った。引率教員を依頼、医学部・看護学部の学生グループが決まったところで「しおり」を作成した。学生グループにはすぐに緊急連絡が取れるようリーダーを決め、リーダーがグループの他のメンバー全員に連絡できるようにした。そのためのテストを行った。学校側の連絡網も皆が共通理解を持つようにした。

しおり完成後、グループ面談の前にグループ担当者向けに上記 3 実習のためのワークショップを行った。そのときに本実習についてグループ面談で協調してほしいことなどを説明した。

7 月に事務方との打ち合わせを行った。8 月下旬にもう一度事務方との打ち合わせをし、その後引率教員へのワークショップを行った。

8) 担当者（医学部学生引率者）

野田小枝子（英語）、八木淳二（微生物学免疫学）、佐藤 梓（化学）、浦瀬香子（生物学）、岡谷理恵子（化学）、松寄英士（看護学部：心理学）、清水一彦（解剖学発生生物学）、西脇洋一（物理）

3-2 実習名：看護の医療対話実習

1) 目的

患者の一番身近でケアを行っている看護師の活動の見学および、看護業務の一部を実践することを通して、患者や家族にとっての看護師の立場や役割を理解する。と同時に、患者中心の医療を推進していくための他の職種を含めたチーム医療の意義と重要性を認識する事を目的とする。また、患者や家族との関わりおよびインタビューを通して、患者家族の体験している世界やニーズを理解するとともに、人間関係を確立するための基本を体験的に学ぶ。

2) 方法

1 年次学年末に、ガイダンス講義の後、2 日間の病棟実習を行う。ガイダンスでは看護師の役割やチーム医療の基本的考え方を理解する。また、実習に際しての態度や注意事項を確認する。実習前に学生各自の行動目標を設定し、これを現場看護師と共有して実習を行う。現場では病棟や看護の特徴に関するオリエンテーションを受けた後、担当看護師と一緒にman to man で行動し、実際の看護業務を見学および実践する。また、患者や家族へのインタビュー、および医師・看護師・その他の医療従事者との関わりやインタビューを積極的に行う。2 日間の実習の最後に、グループ毎に担当の人間関係教育委員または実行委員を交えてグループ面談を行い、実習での体験を他のグループメンバーと共有し実習内容のまとめをする。実習におけるレポートを作成する。グループを担当する教員および実施責任者は病棟をラウンドし、学生の実習状況について観察するとともに病棟主任との情報交換を行い、学生評価の材料とする。

3) 実施

1 年次生 111名について実施(2009) (一名は欠席のため代替課題を実施)。

4) 評価・効果

評価は主に出欠状況、病棟実習中の態度、実習終了後のグループ面談における取組方と気づきをもとにグループ担当教員が行う。学年末のため学生が作成したレポートによる評価は成績には反映しない。実習に対する学生の評価はグループ面談における意見交換とポストアンケートの実施により行う。学生のポストアンケートでは本実習に対する評価は非常に高く、本実習を「非常に意義深い」「意義深い」と答えている学生は99%、医学生にとって「とても必要」「必要」と考えている学生も98%を越えた。学生の自由記述から代表的なものをあげる。「リアルな病棟の様子を知ること出来、看護師が求める医師像、患者が求める医師像を聞くことで自分の目指す医師の在り方がより明確になった」「まだ勉強していないこの時期に行うのでいろいろと刺激を受けるから必要だと思う」「医者になるためには勉強ができるだけではだめで、他人との意思疎通や信頼関係も同じくらい必要だと

いうことに気づかせてくれた」「将来どんな医師になりたいかを見つめ直すきっかけとなった」「看護師の働く様子を知ること、将来の看護師との連携を考えることにつながるためとても必要」「看護師の方、また患者さんが考えている実際の声を聞くことができ、非常に意義のある実習だった。これから自分は2年生になるが、医師を目指す上で自分が心がけるべき点や課題をたくさん発見できたので、これらを達成できるよう努力していきたい」「将来チーム医療が重視される医療現場で働く上で、同じチーム内で働く看護師の仕事に密着した今回の実習は必要不可欠だと思う」。

5) 取組の特徴

本実習は医学的知識をほとんど持たない1年次学生を対象としており、early exposureの意味合いが強い。患者家族に密接に接する本格的な実習は初めて近く、学生は素直な感動を感じている。また、医師と患者の間をつなぎ患者の入院生活を支える看護師や他のチーム医療のメンバーの日常を間近に観察する事により、率直に敬意の念を感じていることが伺え、必要不可欠の実習と言える。他の職種との協働を通じて、チーム医療における医師の位置づけ、役割、望まれる医師像についても深く考える機会となっており、学生が自身を振り返り、今学ばなければならないこと、心構えについて改めて考えるという予想を上回る成果も見られた。

6) 展開上の問題点の整理

行動目標を設定するにあたり、具体的イメージがやや欠如しているため、はっきりとした具体的目標が決定できないケースがある。

実施時期が春期休暇中にあたるため、学生にとっても負担が大きい。また、レポート提出による評価を成績に反映できない問題点があるが、実施時期の変更については今後の検討が必要かと思われる。

第 3 章 医学部・看護学部協働教育の取り組み

1. キャリア発達論Ⅰ 医学部・看護学部協働教育

1) 目的

看護学部と医学部の第1学年生が大東キャンパスにおいて、日常生活援助技術の演習や討論を通して互いの専門領域に対する関心を深め、将来看護師と医師という立場で共に協働していくための基盤づくりをする。

2) 方法

(1) 日程 平成21年9月1日(火)～9月4日(金)Ⅲ～Ⅴ時限

20～23名ずつ4グループに分かれて4日間実施した。

(2) 場所 看護学部大東キャンパス

(3) スケジュール

①開始の挨拶(看護学部学生代表者)、自己紹介

②看護技術演習

③ミニ・テュートリアル

④終了の挨拶(医学部学生代表者)の順に実施した。

3) 実施

1-1：看護技術演習

(1) 目的

看護学部生が日常生活援助技術を実演し、医学部生と共に看護師・患者役を体験することを通して、看護への相互理解を深める。

(2) 方法

日常生活援助には、基本的な看護技術項目である日常の手洗い、臥床患者のシーツ交換の2項目を選定し、看護学部生が企画から実施を行った。

(3) 結果・評価

看護学生は看護技術演習企画書を作成し、事前に模擬演習を実施した。企画書の内容は、①全体の配置(看護実習室ベッドの位置、人員の配置、使用流し台の位置、移動経路など)、②進め方(タイムスケジュール)、③役割分担(説明者、説明内容、役割と動きなど)、④必要物品をグループで相談し具体的に記載した。企画書は、担当教員に途中で1回提出させ、個々に助言を受けている。さらに、事前模擬演習の時間をカリキュラム上に確保し、全員で企画内容の打合せを実施した。

看護学部生は、企画書の作成過程を通して学生間で看護への学びを深めていくことがで

きた。しかしながら、企画書は、学生メンバーおよび担当教員との連絡や意思統一に役立てることができたが、実施後の評価をする機会が持てなかった為、グループでの評価を記載する項目を設けていく必要がある。

実施においては、看護技術演習を医学部生とともに体験することにより、看護専門職を目指す職業人としての自覚を高めることができていた。中には、実演に集中するあまり医学部生とともに演習する場面が持てないグループもあったが、担当教員の指導により医学部生の参加を促し、ともに考える機会を持つことができたことに意義があったと考えられる。

1-2 ミニ・テュートリアル

(1) 目的

医学部で行われているテュートリアル形式での討論に参加し、医療従事者としての各々の立場や考え方の相違について考えてみる。

(2) 方法

医学部生が東京女子医科大学医学部カリキュラムの特色でもあるテュートリアル方式を限られた時間内で簡単に看護学生に紹介し、ともに論じ合う。終了後、医学生とのミニ・テュートリアルの体験をもとに、3つの視点①看護師としての考え方、ものの見方、②医師としての考え方、ものの見方、③看護専門職を目指す自己の課題、についてレポートを作成する。

(3) 結果・評価

事例を共に討論することを通して、医学部生は患者の疾病、看護学部生は心理・社会面に着目するという視点の相違に気づくことができ、それぞれの専門性を認め互いに協働していくことの重要性を学ぶことができていた。

看護学部生は、CDPBLにおいて討論を経験してはいたが、職種の異なる医学部生との討論は初めてのため、視点の違う意見に興味・関心を触発され、これからの学習への動機づけともなっていた。また、医師に留まらず医療従事者の意見に耳を傾けるべきだという意見も出され、立場の異なる意見を受容する姿勢の涵養にも役立つものとなっていた。医学部生との討論を通して看護専門職としての自己に求められているものに気づく機会となり、今後の学習への具体的な課題を発見することができていた学生もみられた。

レポートは、ミニ・テュートリアルの体験をもとに看護師、医師の視点の相違を考え、看護専門職を目指す自己の課題について記述することができていた。看護技術演習企画書についても、自己評価に役立てていけるような内容としていくことが必要である。そこで、今後は看護技術演習企画書をグループ間の自己評価、レポートは個人の自己評価を行うことを目的として実施していく方向で検討していく。

(4) 展開上の問題点の整理

- ①授業時間割がⅢ～Ⅴ時限となっているが、12:30 集合し 18:30 頃終了していた。自宅から通う学生も居るため帰路のバスやJR路線について配慮すると、遅くとも18:00には終了の挨拶を終えることが必要である。授業終了後は、医学部・看護学部生が自由に懇談する時間としていくことが望ましい。
- ②医学部生が東京からバスで当日の朝に大東キャンパスへ移動するため、天候や自然災害によっては中止になることも想定される。そのため、医学部生の不在といった場合に備えて、該当する学生の補習についても検討が必要である。他の実施日がある場合は、学生を振り分けて参加させたり、視聴覚教材を活用し事例検討をするなど、グループ間に学習の差異がでないよう配慮が必要となることが課題である。

(5) 担当者

山元由美子、守屋治代、見城道子、加藤京里、鈴木聡美、菊池昭江

(6) 「医学部・看護学部協働教育」における課題レポート

①看護師としてのものの見方

- 看護師は、患者の精神的サポートを行っていると感じる。
- 看護師は、患者へのケアに対して視点を置いていた。
- 患者の心をどのようにケアしていけばいいのかを中心に考えていた。
- 患者をどのようにすれば安心させることができるのか、患者や家族の気持ちを第一に考えていた。
- 看護師は身体的症状の緩和だけでなく、患者の気持ち（感情）や精神的なことからくる言動に耳を傾け対処する、という目に見えない抽象的な処置に重点を置いていた。
- 看護師は患者の代弁者となって医師に伝え、患者の身体面だけではなく、精神面及び置かれている環境まで幅広い視点を持って物事を考える。
- 看護師ができることは、患者の話を聞き慰め、腎機能が回復するように頑張らしましょう！など、患者を励ますことだと考えた。看護学概論の授業や人間発達論などを通して、相手の立場に立って考えることを多くやってきたから、課題分を読んで最初に患者の心情を考えたのだと思う。
- 看護師は患者の立場に立ち精神的なケアをしつつも、回復が進むように医師と協力していく考えをした。
- 看護師は患者の精神的状態、家族や社会的背景、医師と看護師、看護師と患者のあり方など、患者の病気や症状だけでなく、患者が不安に感じていることや戸惑いの原因など、患者のメンタル面に関しての意見や、看護師は医師と患者の間でどうあるべきか、という患者と患者に関わる人達に対する考え方があった。

- 看護師は患者の気持ちを重視し感情に流されやすくなってしまい、患者を客観的にみられない。

②医師としてのものの見方

- 医師は、治療の合理性を主に考えているので、患者の気持ちをなかなか理解してあげられていない。医師は、患者の身体的サポートを行っているように感じる。
- 医師は、病気の原因や手術のリスクなど「技術的な面」に視点を置いていた。
- 医師は患者の診断・治療を仕事とし、患者の身体・病状・治療法などに視点を置く。
- 医師は、治療や身体的症状の緩和や軽減など現実的・具体的な考え方をすると感じた。
- 医学部生が患者の年齢から議論に入っていたことに、心情から考えていた私はとても驚いてしまった。人工透析や腎不全がどんなものか、インフォームドコンセントについてなど患者自身の事よりも、患者の身体がどうなっているかなどを考えていた。
- 医師は、手術のリスクや腎臓の状態と腹部のヘルニアの関係性など、広い視野で先を見通した考え方、ものの見方をしていることに気づいた。
- インフォームドコンセントについては、医師としてもより患者にわかりやすい説明をするという考え方は、看護師の考え方と目指す方向性は同じだった。
- 看護学部生が対象者への働きかけを考える中、医学部生は対象者自身が医師や看護師に働きかけを行うことがあってもいいのではないかと考えていて、医師と看護師では対象者に対する考え方が異なると感じた。（患者は医師に任せすぎるから自分自身で調べることも大切といった意見など）
- 医師は患者の病気をベストな状態で治すことを望んでおり、少しでもリスクがある場合は避けたいと考えていることが発言からわかった。患者の期待を感じている医師自身も、手術を断念しなければならないことを患者に伝えることは、辛いことではないだろうか。
- よりよい治療法と治療の進め方をすることが患者の求めていることであり、実践することによって患者の抱く不安や孤独を取り除けると考えていた。
- 医師は、患者の病気や状態を重視するので感情に流されず客観的にみることで、患者の身体をよりよい方向へと導くことができる。

③看護専門職を目指す自己の課題

- 看護師は心のケアのみに留まらず、正確な知識と判断を持たなければならず、そのような看護師に近づけるよう、今後の経験を大事にしていきたい。
- 医師、看護師、その他の医療従事者とのチーム医療で患者さんの病気をしっかり見ていきたい。その中でも、看護師は、患者さんの一番近くにいる存在なのだから変化に気づいてあげたりして、患者さんの支えになりたい。
- 相手の立場に立つこと。

- 観察力と科学的ケアを身に付けること。
- 患者の不安や戸惑いに親身に相談に乗れるような看護が提供できるようになりたい。
- 患者の話を聞き、よく観察し、常に親身になって考えながら、患者にとって何が最もよいのか、医師を始めチームの中で話し合って決定することが、看護専門職を目指す自分の課題である。
- 医師に患者の思いを伝えること、医学的知識とケアの知識・技術の両方を養うこと。
- 看護師側だけでなく医師側の視点からも物事を捉えられる看護師になりたい。
- 看護師・医師だけに限らず、他の医療従事者側・家族側などの視点からも考えられる幅広い視野を身につけていきたい。
- 病状の説明や治療方法を患者に納得できるように説明できる知識を身につけること。医療に関わる人との交流を深め、考え方について話をする 것도大切だ。
- 固執することのない、状況に応じて物事を幅広い視点でみることのできる、柔軟性が必要であると感じた。沢山の人と関わりを大切に、様々な意見や考え方に触れることでコミュニケーション能力を磨き、チームの中でも活躍できる看護師に近づくこと。
- チーム医療では看護師としての考え方に自信を持ち発言する事、端的に伝達することなど、他の意見にも耳を傾け理解することが必要であることから、コミュニケーション能力の向上を課題としていきたい。
- 病院や老人施設などでボランティアをして、色々な人と話をし、経験を積んでいこうと思う。
- 看護師としての意見を持ち、患者のためになると思うことは積極的にわかりやすく伝えられるよう、一つひとつの知識・技術・考え方を学んでいく。
- 医療従事者と協働していく中で自分の意見を発言することは大切だ。情報を正確にまとめて発言できるようにする。
- 自分の仕事に対して責任を持つこと、患者を慮ることのできる人間性、些細な事にも気づく観察力を身に付ける。
- 色々な患者がいて大変だと思うけれど、笑顔で心のケアができる看護師になりたい。どんなに忙しくても心に余裕が持てる人間になりたい。
- 医師と看護師が患者を健康に近づけるという目的に向かって共に努力し、信頼し合うことでよい医療を提供していく。医学部生よりも2年先に現場に立ち、今回出会った医学部生の方達をサポートできるよう頑張りたい。
- 患者を一番に考えられる看護師になるために、普段から優しさを持ち信頼感や安心感を与える振る舞いを意識してみようと思う。

2. 医学部・看護学部協働教育（合同カンファレンス）

1)目的

共通する患者の事例の問題解決にあたり、医師、看護師としてのそれぞれの支援の目的およびアプローチの方法、役割に関して共有し、協働の必要性和方法について学ぶ。

2)方法

(1)対象者

医学部 5 年生	ブロック 7（小児科・産婦人科・神経精神科実習）	30 名
看護学部 3 年生	（小児看護学実習有・母性看護学実習・精神看護学実習）	40 名
		合計 70 名

(2) 実施方法

小児科、精神科では基本的に両学部の学生が受け持った共通する患者の病態、診断、治療、看護ケアについて両学部の学生からプレゼン、ディスカッションを通して、患者に行われている、あるいは必要な医療の内容とその実際を知り、それぞれの立場の視点の相違や共通性、よりよい医療としてのあり方を意見交換した。

産婦人科では、医学部生と看護学部生の実習目的や対象患者が異なり、共通の患者に関して議論する事が難しく、いずれか一方の学部の学生の学習状況に合わせてテーマを設定して行った。

一回 1 時間程度で行い、グループによってはホワイトボードを活用して行った。

3)実施

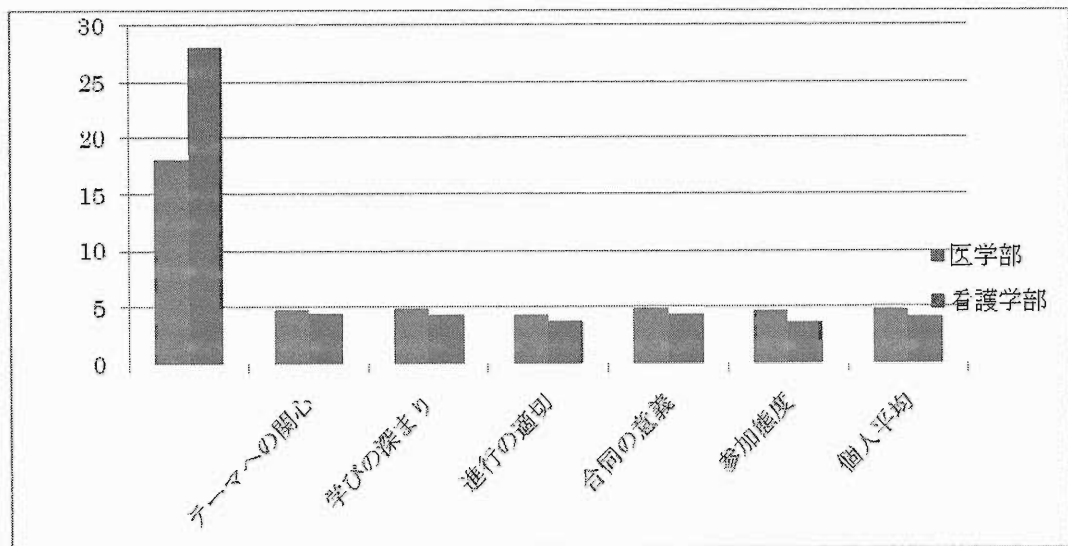
平成 21 年 10 月～12 月の実習期間中に実施

4)評価・効果

学生、教員からも相互の立場を理解するのに効果的な学習との評価が多かった。授業評価アンケートの結果は以下の通りである。

2009 年度 合同カンファレンス 学生授業評価アンケート結果

		(n)	テーマへの 関心	学びの 深まり	進行の 適切	合同の 意義	参加 態度	個人 平均
学部別	医学部	18	4.8	4.9	4.3	4.9	4.7	4.7
	看護学部	28	4.4	4.3	3.7	4.3	3.5	4.1



5) 展開上の問題点の整理

(1) 対象学生について

できるだけ多くの学生が取り組める様な調整が必要である。

(2) 時期について

医学部と看護学部の学生の学年差がある点が難しい部分がある。しかし、現段階では、共同で開催できる唯一の時期であるので、今後も続ける事が望ましい。

(3) 内容について

立場と学習の進行の相違を踏まえたテーマ設定と進行の工夫が必要である。

(4) 運営について

教員の負担が大きい一方、実習病棟と担当教員に偏りがあるが、学習の効果も大きい
ため、できるだけ多くの教員が体験できる機会を設けたい。

(6) 担当者

吉岡俊正教授（医学教育学）、奥野順子講師（小児看護学）、牧野康雄准教授（産婦人科）、原田通予助教（母性児看護学）、木所篤子師長、中嶋真紀子主任、長谷川大輔助教、小崎香織助教（神経精神科）、山内典子助教（精神看護学）、斉藤みよ子師長、柴田啓美主任

合同カンファランス(ブロック7ー小児科・小児看護学実習)の評価		合同カンファランス(ブロック7ー産科・母性看護学実習)の評価	
<p>日時:10月16日実施 担当:吉岡俊正教授(医学部)・奥野順子講師(看護学部) 参加者:医学部5年生6名・看護学部3年生6名 内容:共通の患児(喘息)に関してそれぞれの立場から紹介、討議</p>	<p>日時:12月11日実施 担当:吉岡俊正教授(医学部)・奥野順子講師(看護学部) 参加者:医学部5年生6名・看護学部3年生5名 内容:共通の患児(川崎病)に関してそれぞれの立場から紹介、討議</p>	<p>日時:11月27日実施 担当:牧野准教授(医学部)・原田通予助教(看護学部) 参加者:医学部5年生3名・看護学部3年生8名・中嶋看護主任 内容:産褥期のケアについて看護学生が発表、ディスカッション 乳房マッサージについて医学部生と実施 医学部生が前週に分娩見学ができなかったために、カンファランス中に分娩見学が入り、25分間中断した。医学部生は正常な産褥に関する知識が不十分であったため、牧野医師が知識の確認をしながら進化した。 次回両学部生が共通の産婦か褥婦を受け持ち、ディスカッションの充実を図る</p>	<p>日時:11月27日実施 担当:牧野准教授(医学部)・原田通予助教(看護学部)・日沼教授(看護学部) 参加者:医学部5年生3名・看護学部3年生8名・中嶋看護主任、師長 内容:高血圧のため入院管理中の妊婦の病態について医学部学生が発表、この妊婦の看護について看護学部学生が発表、ディスカッション 医学部生が受け持っているが、看護学部学生は文献で一般的なケアに付いて学習したのみであったが、それぞれの立場からの報告があった。ポストイットなどを活用して、それぞれの情報整理をしたが教員間の役割分担がやや不明確であったことと、事前の進行や資料の提示に対する指示が徹底せず、学生にとまどいがあった。</p>
感想	感想	感想	感想
全く違う視点からの意見がききました。病棟で看護師さんとお話する機会が全くなかった。今回このような場で意見交換ができ、お互いの感じている良い面悪い面も知ることができました。将来同じ場で働く者同士、協力し合って患者さんを快方へと導けたら良いです。現在の状況が改善することを願っています。	同じ患者に対して双方がまず第一に気にするところが違い、気になっていたケアに関することが学ぶ事ができた。医師の投薬や治療が成立しているのは、看護師がいるからだと改めて思った。	医学部の立場からだと思患者さんの病態を意識してしまうので、正常の状態以外にあまり他のことが考えられず、今回、患者さんの心理などを考える大切さが分かりました。	あまり準備する時間もなくて、進行の仕方も良くわからなかった。そこで残念でした。
近いようで遠い存在であった看護師さんが、普段どのような視点から患者さんと接しているのかということが、とてもよく分かりました。目標はそれぞれ同じでも、それに到達するまでの家庭が医師と看護師とでは異なっており、その違いがとても重要であること、より高い目標に到達するためにはお互いの密な連絡・情報交換が大切であることを実感しました。今日感じたことをいつまでも忘れないようにこれから両者協力して患者さんのために努力していこうと思いました。	今回のカンファランスにより、看護学生さんによる患者さんの精神的ケア(苦痛をとる方法など)を学ぶ事ができ、改めて医療は一人ではできない、チーム医療の大切さというものを実感しました。	看護師と医師の仕事はかなり違う事が分かりました。症状の改善のためには治療だけではなく、看護の力も大きいのだと思いました。	あまり準備する時間もなくて雰囲気も分からず大変でしたが、楽しく参加できた。
看護学部の方から発表・お話を聞くことで、発表内容の1つをとっても全く異なる視点から患者さんを見て、ということがわかり、とても勉強になりました。実習中も、医学生からは病態について、看護からはより患者さんの心により添っている、生活面などから、様々な情報を共有することができました。	普段から、医師と看護師が同じ患者さんについて一緒にカンファランスすれば良いなと思いました。	看護学部の方と症状について話す機会は今までなかった。症状の改善のためには治療だけではなく、看護の力も大きいのだと思いました。	看護学部の方と一つの症例について話す機会がなかったので、興味を持って参加できた。
今回の喘息は、治療・診断などについてガイドラインが決定されているので、もう少し柔軟性のある疾患(型)にはめられていない診断・治療の疾患の方が良いと思います。	実際の場でもどのように情報交換しているのか、気になった。	医学の視点と看護の視点が違ったので、良かったと思います。	もっと頻繁に情報を聞きたかった。(カルテだけではなく、医学部生から直々に)
一人の患者さんについて、医学生と看護学生が違う立場で実習をしているので、疑問というものはあふれかたす。特に敢えて同じ患者さんをもたなくても、このカンファランスはできると思う。うちの班だけでなく、学部全体で交流がもてたらいいと思う。	データだけに視点をあおらず、患者さんの人間性に目を向けた話しが聴けて、とても有意義でした。医師もデータしか見ていない訳ではなく、診断と治療のために一生懸命考えている事を是非知ってもらいたいです。また、自分自身も人間性に注目していきたいです。	同じ症例についてカンファランスできたので良かったと思います。看護の視点と医学の視点が違う事が分かり、看護者としてやるべき事、やらなければならないことが明確になったので良かったです。	どんな風にカンファランスを進めていくのか、情報不足でムズでなかった気がする。実際に受け持っていない患者だったので、個性を捉えきれなかった
医師と看護師では、患者への接し方が違う。しかし、患者を治し、普段の生活に戻すという目標に変わりはないので、医師としてきちんと治療することが大切だった。	今回、医学部看護学部学生の合同カンファランスという事で、初めての経験だったので、得る物はとても多かったと思う。視点がかなり異なっている2つの立場であり、患者さんを中心として行う医療として、協力していきたいと思う。	今回はテーマがさだまっていなかったが、医師がどんな視点で何を見ていたのかは、退院診断と出産の時以外、病棟では分からず感じられなかった。もう少し具体的にお互いの行っている事が交換できると良いと思った。	もっと事前に日にちや受け持ち患者などを決めておいて欲しいと思いました。
プライドを捨て、分かちあおうとしないう限り、このカンファランスは無理だと思、医学部生の関心がある姿勢には、私のイメージが少しくなった。	自分の理解の低さ、学舎視点の低さに気づくことができた。また、違った視点があるので、視点を広げてみる事ができた。	医学的・看護的な視点が全く違うので、面白かった。看護で行っている視点をもっと知ってみたいと思った。	もう少し、私たちも病態などについて知識がないといけないと感じた。でも、いろいろな視点から考える事ができてよかった。
面倒くさいと思っていたけど、意外におもしろかった。進行の仕方やテーマがもっとはっきりしていれば、もう少しやりやすかったと思う。事例についてカンファの前には現病歴や経過などを予め知っておく方が話に入りやすいのではないかと思う。	改めて、医師と看護師の視点の違いに驚きました。同じ患者さんを見るのに、こんなに異なるのかとびっくりしました。患者さんと主に関わるのは看護師であって、人間性なども見て、医師は身体面などを看していくのだと感じました。とても勉強になりました。ありがとうございました。	看護の視点と医学の視点が違う事がわかり勉強になった。	緊張しました。でも、知識や視点の違いに気づけたのでよかったです。看護学部は受け持ち事ができなかった。受け持っていたらもっと深くカンファランスを行う事ができたのではないかと感じました。
学生にとって医師は遠い存在だったが、今回のカンファを通して意見交換をしたことで医師の考え、意見を知ることができたので、今後働く上でよりよい関係を築けると思う。また、医師と看護師のとの交流は患者によりよいケア・治療を行う上でもとても大切になると思うので、このようなカンファランスを行うことは、医師・看護師・患者にとって良い事だと思う。	合同カンファランスは2回目だったが、又前回とは違う雰囲気や発言しやすかったと思う。それぞれその視点で一人の方を受け持っていて、すごく面白かったと思う。	自分の考えがあるにも関わらず、その場で発言する事ができなかった。しかし、それぞれ見方が違うのが分かったし、勉強になった。	両方の考えを聞いたのでよかった。
害っていることが難しく、理解できない事もたくさんあった。1つの事例でやることも大切なかもしれないけれど、受け持っていない人には分からない事もあると感じた。	すごいためになりました。ありがとうございました。		ご本人にどのように関わっていくのが分かり、勉強になりました。今後協働していくことが大切だと思いました。
結果的に一人の子を受け持ったその子についてカンファするのではなく、はじめから(実習開始)から同じ子を受け持った、意見交換しながら実習できれば、その方が深い学びになると思う。			
Dr.とNr.の考え方にあまり差がない事を知った(今回参加して)とても良かったと思う。働き出してからこういう場をもち、連携をとっていくと良いと思う。			

合同カンファレンス(ブロック7ー神経精神科・精神看護学実習)の評価		合同カンファレンス(ブロック8ー神経精神科・精神看護学実習)の評価	
<p>日時:11月26日実施 担当:長谷川医師(神経精神科) 山内典子助教(看護学部)</p> <p>参加者:医学部5年生3名・看護学部3年生3名、齋藤師長、柴田主任 内容:共通の患者(統合失調症)に関してそれぞれの立場から紹介、質問と討議</p>	<p>日時:11月27日実施 担当:小崎医師(神経精神科) 山内典子助教(看護学部)</p> <p>参加者:医学部5年生3名・看護学部3年生3名、齋藤師長、福田主任、小島実習指導者 内容:共通の患者(統合失調症)に関してそれぞれの立場から紹介、質問と討議</p>	<p>日時:12月17日実施 担当:長谷川医師(神経精神科) 山内典子助教(看護学部)</p> <p>参加者:医学部5年生3名・看護学部3年生3名、齋藤師長、柴田主任 内容:共通の患者(統合失調症)に関してそれぞれの立場から紹介、質問と討議</p>	<p>日時:12月18日実施 担当:小崎医師(神経精神科) 山内典子助教(看護学部)</p> <p>参加者:医学部5年生3名・看護学部3年生3名、齋藤師長、小島実習指導者 内容:共通の患者(うつ病)に関してそれぞれの立場から紹介、質問と討議</p>
感想	感想	感想	感想
<p>医学部生:</p> <ul style="list-style-type: none"> ・患者の問題をより生活に即して捉えて看護しているということがわかった。 ・情報交換をすることでお互いの立場から知っていることを共有できることを学んだ。 ・看護学部生が患者が今後、どのような社会資源を使うことが有効かまでを考えていること、また内容を知り勉強になった。 ・同じ情報を捉えても医師・看護師という役割の違いによって、その活かし方が違うということを知った。しかし、方向は同じであることも知った。 ・看護学部生が発表したように、患者本人がどのようになりたいたい希望しているのか、家族の支援や期待を知ることとはとても大事だと思う。 	<p>医学部生:</p> <ul style="list-style-type: none"> ・見えているものに違いがあることに驚いた。私たちは主に病気をみているが、看護では生活面をみていることを学んだ。 ・患者にとってよい医療を考えると、職種間で得た情報を互いに共有し合い、ひとつの目標に向かうことが大事であることを学んだ。 ・私たちは疾患という側面を重視しているが、看護学部生は、患者の訴えをより具体的に捉えていると思った。それを医師側が知ることは治療上、とても大切だと思った。 	<p>医学部生:</p> <ul style="list-style-type: none"> ・発表を聞いて、看護師や看護学生がどのようなことを行っているのか仕事の流れがわかった。 ・自分たちの役割でもあるが、疾患から入り、学んでいく癖がある。しかし、看護師や看護各生はその患者の生活をとても大事にみているし、関わっているということを知れた。これを医師として働く前に知れたことがよかった。 ・チーム医療が大事ということは授業でも聞いていたが、実際にどのように成り立っているのかを直に具体的に知ることができた。 ・看護学部生の発表を聞いて、この患者さんがどのようによくなるのか、その過程を知ることができた。毎日少しずつ変化していくことをみれていて素晴らしいと思った。 ・看護学部生が生活の一つ一つに目を向けて細かく援助していることや会話の分析(プロセスレコード)を行っていることを知った。 ・短い時間で、このようなカンファレンスの準備を行うことがきつかった。カンファレンス自体の意義はあると感じたので、実習時期を考慮してほしい。 	<p>医学部生:</p> <ul style="list-style-type: none"> ・日常生活上の訴えを医師側も知ることが必要であり、このような話し合いの機会は大変だと思う。 ・医師だけ、看護師だけで情報を無駄にためるのではなく、お互いが持っている情報を出し合うことで患者にもよい医療が提供できると思う。 ・看護学部生がどのように実習を進めているのかを具体的に知ることができた。この患者はうつ病で話したくないと言って拒否されてしまったために、自分としてもどのように聞きだせばよいのか悩んでいた。今日、看護学部生がどのようにコミュニケーションをしていたのかを具体的に聞けて学びになった。 ・同じ患者さんを受け持ち、どのように捉えているか、難しく感じているかを共有できて、看護学部生を身近に感じる事ができた。もっと早くこのような機会があればよかった。 ・外来を先に行うグループであったために、ほとんど患者に関わる事ができないままに臨んだが、この状態ではせっかくのカンファレンスももったいない。是非実習時期を考えてほしい。
<p>看護学部生:</p> <ul style="list-style-type: none"> ・発表を聞いて、医師は症状を細かくみて疾患に対して診断をしていくということがわかった。 ・お互いに情報交換をしてみると、医学部生も同じように患者の問題点を出していることがわかり、また自分たち看護学生と問題や目標と同じように捉えていることがわかった。情報交換をすることの重要性を知った。 ・医学部生の発表を聞いて、逆に看護師としての役割がみえたと思う。 ・医師がどのようにして患者に合った薬を選んでいるのかを学ぶことができた。 	<p>看護学部生:</p> <ul style="list-style-type: none"> ・適切な診断をして治療するためにとても細かく情報を集めていることを知った。 ・医師の立場からどのような情報がほしいのかを知ることができた。 ・今後、外来通院になったとき、患者が急薬して具合が悪くならないように薬の種類や方法を考えていることを知って勉強になった。 ・発表することに緊張してしまっていたが、行ってみると、話し合われなければ知れない情報があり、大事な場であることを知った。 ・医学部生がとても短い時間の中で、これだけ細かな情報を得て診断をつけていくことを知り、大変だろうと思った。 	<p>看護学部生:</p> <ul style="list-style-type: none"> ・医学部生とは時々しか会わないために、何をしているのかがわからなかった。このように多くの情報を整理して、診断をしていくことを知り、私たち看護学部生とはまったくレベルが違うということを知った。 ・医師だから知る情報、看護師でなければ知れない情報があり、それぞれの立場からとれる情報をしっかりとって、それをこのように共有することが大事であることを知った。 ・短い時間でレポートをまとめており、その能力に驚いた。自分たちは、患者と密に関わることができる立場にあり、それは得意としていいところだということも感じることができた。 	<p>看護学部生:</p> <ul style="list-style-type: none"> ・今までの実習では、同じ患者に対して医師と看護師で目指すところが違っていたり、それぞれに悪く言っているような場面を目撃した。目標は同じであることが望ましく、このように話し合いをすることが必要だと思う。 ・特に精神科実習で感じたことは医師と看護師がよくコミュニケーションをとっているということだった。普段からそれが行われていることがすごいと思う。 ・医学部がどのような実習をしているのかわかっただけでも学びだった。 ・患者をどうみているかもそうであるが、医師が看護師をどうみているのかということも知れてよかった。

授業評価アンケート

本日の授業について、下記のあてはまるところに○をおつけ下さい。

1. あなたの学部、学年は（ 医学部5年 看護学部3年 ） 実習病棟（ 病棟 階）

2. 本日のテーマは関心がもてた

5. とても思う 4. 少し思う 3. どちらともいえない 2. あまり思わない 1. 全く思わない

理由【 】

- ### 3. テーマに関して学びが深まった

5. とても思う 4. 少し思う 3. どちらともいえない 2. あまり思わない 1. 全く思わない

理由【 】

4. カンファレンスの進行は適切であった

5. とても思う 4. 少し思う 3. どちらともいえない 2. あまり思わない 1. 全く思わない

理由【 】

5. 両学部で学生で合同カンファレンスを行うことは意義がある

5. とても思う 4. 少し思う 3. どちらともいえない 2. あまり思わない 1. 全く思わない


理由【 】

6. 私は熱心にカンファレンスに参加した

5. とても思う 4. 少し思う 3. どちらともいえない 2. あまり思わない 1. 全く思わない

理由【 】

7. 本日の合同カンファレンスに関して、感想、ご意見を自由にお書き下さい。



記入後は看護学部教員にお渡し下さい。ご協力ありがとうございました。

3. 医学部・看護学部合同解剖慰霊祭実習

－亡くなられた方から学ぶ医学・看護学－

1) 目的

解剖慰霊祭への参列を契機として、各種解剖の意義を学習すると共に、生命の尊さと人の死の捉え方についての理解を深め、医師・看護師として死者と御遺族に敬意を持って接する能力を養うことを目的とした。また、医学部と看護学部が合同で行い、将来のチーム医療を担う両学部学生の相互理解の機会とした。

2) 方法

(1) 対象者

医学部 1 年生 112 名と看護学部 2 年生 90 名を対象とした。なお、医学部学生は必須ではないが極力出席することとし、看護学部学生は必須とした。

(2) 方法

講義とグループ討論・発表を組み合わせた実習とした。講義では 佐々木宏 教授が系統解剖、小林楨雄 教授が病理解剖、呂 彩子 講師が法医学解剖について説明した。また、医学部学生の村田愛結さんが法医学実習について報告した。グループ討論・発表では両学部学生の混成による 4～5 人のグループで終末期患者に関する課題に取組、総合討論を行った。評価として、授業評価アンケートを行った。

(3) 実施

平成 21 年 10 月 9 日（金）午後 4 時 10 分～5 時 35 分に行った。

3) 評価・効果

(1) 出席者は医学部 21 名と看護学部 74 名であった。医学部学生は必須ではなかったために出席者が少なかった。

(2) 講義とグループ討論・発表からなる内容の多い実習であった。講義では各種解剖の意義と役割に加え、死の概念、死者と御遺族への接し方についての説明がなされた。グループ討論・発表で用いた課題は人の死の捉え方とチーム医療の役割の理解に役立つ内容であった。

(3) グループ討論・発表の状況と授業評価アンケートの結果から、出席した両学部の学生は、本実習に熱心に取組、患者の死への対応に関する諸問題を理解し、チーム医療での連携と情報の共有の重要性を認識したものと考えられた。

4) 展開上の問題点の整理

- (1) 医学部の学生の出席者が少なかったが、看護学部との合同の実習であるので、医学部でも必須の実習とする必要がある。また、解剖学実習が終り、病理学を学習している医学部2年次での実習とすることが望ましい。なお、必須でなくても出席する自己研鑽の姿勢を養うことも大切である。
- (2) 各種解剖の意義を学習し、生命の尊さと人の死の捉え方についての理解を深めるためには、本年度同様、講義とグループ討論・発表の両方による実習とすることが望ましい。また、グループ討論・発表を充分に行うためには実習時間を2コマ(180分)とすることも検討されたい。
- (3) 人の死とチーム医療の両方に関するグループ討論用の新たな課題を作成する予定である。

5) 担当者

人間関係教育委員会委員 岡田みどり 准教授と同委員 木下順二 准教授から協力を得た。
人間関係教育委員長 齋藤加代子
看護学部教務委員長 日沼千尋
解剖慰霊祭委員長 木林和彦

資料

1. 学生への通知文(医学部学生用と看護学部学生用)
2. タイムスケジュール
3. 講義資料(佐々木教授、小林教授、呂講師、村田さん)
4. グループワーク実施要領と記録用紙
5. 課題(提示事例と解説)
6. 授業評価アンケートと集計結果
7. 写真

看護学部2年生

医学部・看護学部合同解剖慰霊祭学習について

この度、医学部・看護学部合同解剖慰霊祭実習を下記の要領で実施します。この学習の目的は、解剖慰霊祭への参列を契機として、各種解剖の意義を学習すると共に、生命の尊さと人の死の捉え方についての理解を深め、医師・看護師として死者と御遺族に敬意を持って接する能力を養うことにあります。

今回の学習は、将来のチーム医療を担う両学部学生の相互理解のためにも貴重な機会です。この学習は9月25日5限に予定されていた病態学B-1（解剖慰霊祭オリエンテーション）を移動し、事後学習として行うものです。出席は通常の講義と同じ扱いです。

記

医学部・看護学部合同解剖慰霊祭学習
－亡くなられた方から学ぶ医学・看護学－

対象：医学部1年生（112名）、看護学部2年生+科目等履修生（91名）

日時：平成21年10月9日（金） 午後4時10分～5時35分（5限）

場所：看護学部 4階141教室、5階154教室 2教室に分かれて行います。

出席番号が1～45番の人は141教室、

46番以降の人は154教室に集合して下さい。

グループ分けは当日発表します

内容：

- | | | |
|---------------------------------|----------|-----------|
| 1. 本学習について | 看護学部・医学部 | 日沼千尋・木林和彦 |
| 2. 系統解剖から学ぶこと | 医学部解剖学 | 佐々木宏 |
| 3. 病理解剖から学ぶこと | 医学部病理学 | 小林慎雄 |
| 4. グループ討論 | 学生全員 | |
| 両学部学生混成の小グループで課題について討論する | | |
| 課題 患者の死亡への医師・看護師の対応（提示事例について討論） | | |
| 5. 法医学解剖でのご遺族への対応の取り組み | 医学部法医学 | 呂 彩子 |
| 6. 死者から学ぶ医学教育の実践 | 医学部1年生 | 村田愛結 |
| －法医学夏期見学実習報告－ | | |
| 7. グループ別発表・総合討論 | 学生全員 | |
| 8. まとめ | 看護学部・医学部 | 日沼千尋・木林和彦 |

グループワーク実施要領

1. グループ分けについて

- ・1 教室 12 グループ、全体で 24 グループ作る
(看護学部 4 名 + 医学部 3~4 名)
- ・医学部、看護学部ともに教室を事前に指定する。
- ★ アイスブレイキングのために、各教室 12 グループにして、誕生月に分かれて着席してもらう(多少、数が偏る危険性あり)

2. グループワークのテーマ・学習目標について

- ・患者の死亡への医師・看護師の対応 (提示事例について討論)

テーマ:「亡くなる患者への医師・看護師の対応」

解剖慰霊祭への参列体験を通して、患者と家族が納得できる医療・ケアとはどのようなものか、そこでのそれぞれの立場における役割を考える機会とする。

3. 進行について

	154 教室 1-11 グループ 木林教授担当	141 教室 12-22 グループ 日沼教授担当
16:10~ 16:13	アイスブレイキング: 誕生月毎グループ 分け 3 分 教室入り口で誕生日の月のグループに座ってくださいと指示する。	アイスブレイキング: 誕生月毎グループ 分け 3 分 教室入り口で誕生日の月のグループに座ってくださいと指示する。
16:13~ 16:15	本ワークショップについて (木林教授) 2 分	本ワークショップについて (日沼教授) 2 分
16:15~ 16:25	系統解剖の今後のあり方 (佐々木宏教授) 10 分	病理解剖・診療関連死モデル事業の役割 (小林槇雄教授) 10 分
16:25~ 16:35	病理解剖・診療関連死モデル事業の役割 (小林槇雄教授) 10 分	系統解剖の今後のあり方 (佐々木宏教授) 10 分
16:35~ 17:05	課題を提示しグループワーク 30 分 名前ラベルを貼って下さい	課題を提示しグループワーク 30 分 名前ラベルを貼って下さい
17:10~ 17:15	法医解剖でのご遺族への対応の取り組み (医学部法医学 呂 彩子) 5 分	死者から学ぶ医学教育の実践 ー法医学夏期見学実習報告ー (医学部 1 年 村田愛結) 5 分
17:15~ 17:20	死者から学ぶ医学教育の実践 ー法医学夏期見学実習報告ー (医学部 1 年 村田愛結) 5 分	法医解剖でのご遺族への対応の取り組み (医学部法医学 呂 彩子) 5 分
17:20~ 17:30	グループ発表 総合討論 10 分	グループ発表 総合討論 10 分
17:30~ 17:35	まとめ・判決文配布 (木林教授) 5 分 授業評価アンケート記入 ワークシート提出	まとめ・判決文配布 (日沼教授) 5 分 授業評価アンケート記入 ワークシート提出

★講義・発表をされる先生方には教室を移動していただく。

★グループワークを始める際に、進行係と記録係、発表係を決めてもらう
(自主的にでるのが望ましい)

★学生の発表ー 3～4 グループ+追加意見 各グループ 2 分程度で

4. 事前準備

①学生へのオリエンテーション

看護学部は解剖慰霊祭終了後、日沼教授から資料(本資料 1 枚目)を提示して説明
同じ資料を掲示板に掲示

②教室準備(看護学部教員・学務課)

- ・事前に 8 人 1 グループで 12 グループに机と椅子を並べておく。
- ・机の上に三角札でグループの NO を 1～12 まで表示しておく。
- ・黒板にグループの位置を板書しておく
- ・準備・片付けは学生に協力してもらう
(机の並び替えを看護学部クラス委員に事前に知らせておく)
- ・パワーポイントを使用できるようにする? パワーポイントなどを使用する場合は、事前にパソコンに読み込んでおくー医学部教員への連絡(木林)
- ・マイクの確認

③資料

- ・グループワーク用 事例 (210 枚)
- ・判決文 (210 枚)
- ・ワークシート (24 枚)
- ・授業評価アンケート 回収箱

④当日の案内

- ・医学部 1 年生に看護学部までの順路を通知する
- ・看護学部玄関に案内ボードを表示する
- ・看護学部玄関前で案内する(解剖学教室 森さん)

⑤事後作業

- ・アンケートの集計

グループワーク 記録用紙

グループ G

学籍番号	
M-〇〇	() () () () ()
N-〇〇	() () () () ()

課題について話し合ったことを書いてください。

授業評価アンケート

本日の授業について、下記のあてはまるところに○をおつけ下さい。

1. あなたの学部、学年は（ 医学部1年 看護学部2年 ）

2. 授業のテーマは関心がもてた

5. とても思う 4. 少し思う 3. どちらともいえない 2. あまり思わない 1. 全く思わない

理由【

- ### 3. テーマに関して学びが深まった

5. とても思う 4. 少し思う 3. どちらともいえない 2. あまり思わない 1. 全く思わない

理由【 】

4. 講義内容（系統解剖から学ぶこと・病理解剖から学ぶこと）は分かりやすかった

5. とても思う 4. 少し思う 3. どちらともいえない 2. あまり思わない 1. 全く思わない

理由【 】

5. 両学部で学生で討議することは意義がある

5. とても思う 4. 少し思う 3. どちらともいえない 2. あまり思わない 1. 全く思わない

理由【 】

6. 私は熱心に授業に参加した

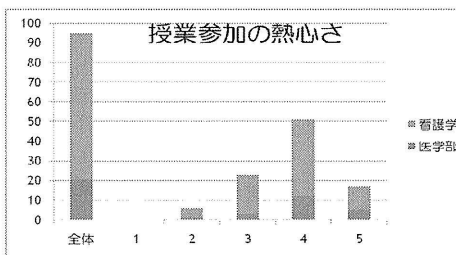
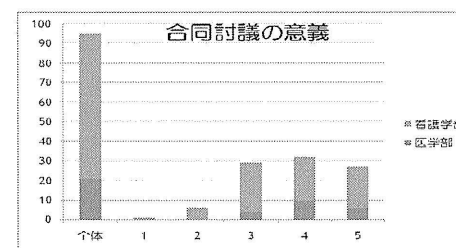
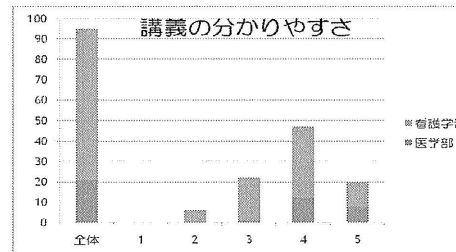
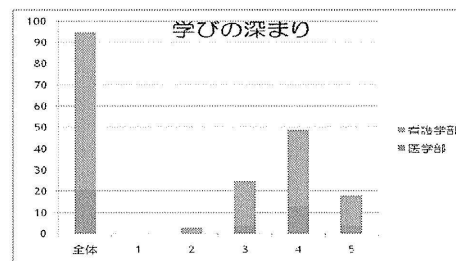
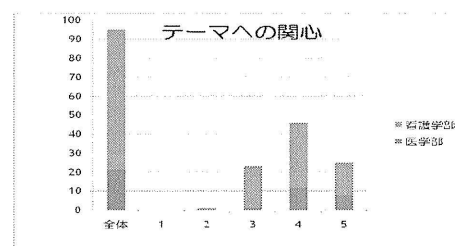
5. とても思う 4. 少し思う 3. どちらともいえない 2. あまり思わない 1. 全く思わない

理由【 】

7. 本日の授業に関して、感想、ご意見を自由にお書き下さい。

記入後は回収箱にお入れ下さい。ご協力ありがとうございました。

授業のテーマに関心が持てた	
3の理由	時間が短くて残念です。
4の理由	解剖は身近になりたい授業だったので、始まる前に聞けて良かった。
	人体について詳しく知れた。
	解剖や献体については、自分の考えを持っておいだ方がいと思う。
	解剖された人の家族の気持ちを考える上で、大切だと思うから。
5の理由	成人実習で末期がんの患者さんを受け持ったので、興味はあった。
	慰霊祭に参加した事で興味があった。
	今から解剖を行うため、この様なものなのを知ることが出来るから。
	もうすぐ解剖が始まるから。
	今まで知らなかったことも多くきまっていたから。
	村田さんの発表が良かったから。
	解剖の演習や慰霊祭を通して、少しずつ関心が高まっていたので。
	課題の事例のようなケースは、これから経験することがあると思うから、今回考えることができて良かったと思うから。
実際に検体を前にして、学ぶことが沢山あったから。	
実習の時から献体が気になっていた。	
テーマに関して学びが深まった	
3の理由	医学部がいなかったから、医師側からの意見が聞けなかった。だが、いなくても看護学部だけで学びが深まった。
4の理由	医学部の人と討議ができなかった為。
	もう少し詳しく知りたくなりました。
	普段学べないことだったので。
5の理由	皆の意見が聞けて勉強になった。
	自分で考えるだけでなく、意見交換が出来たので。
	解剖学の検査の多さに驚いた。
色々な方のお話を聞いて。	
解剖学の必要性を理解できたから。	
講義内容は分かりやすかった	
2の理由	時間が短すぎて、あっという間で、あまり理解できなかった。
3の理由	医学部が1名しかいなかったから。
	医学部の1年と看護学部の2年だと少し親しめないと。どちらも2年生で行った方がよいかと感じました。
	ペースが早く、少し分かりづらかったかもしれない。
	ざっとした内容だったので、勿論学ぶ事はあったが、短い時間という事が残念だった。
4の理由	プリントが読みやすかった。
	勉強になった。
5の理由	少し難しい語句があった。
	難しい講義ではあったけど、興味を持って聞くことができたから。
	客観的・主観的に捉えるという話が興味深かった。
小林先生の講義がとても興味深かった。	
両学部の学生で討議することは意義がある	
2の理由	医学部がほとんどいなかったため、討議といえるのか・・・？
3の理由	医学部がいれば、討議することに意義はあったと思う。
	話し合う時間が短かった。
	両学部で討議することは意義があることだと思うが、今回は偏りがあり、良くなかったと思う。
	医学部がいなかったためわからない。でも意義はあると思う。
	医学部の方がほとんど知識がなかった為、看護の側面では話し合えなかった。
	意義はあるかもしれないが、N4:M1だったので、両学部で討議という感じがしなかった。
	お互いの学部的意見は出なかったと思うので。
	提示事例が微妙だった。
	医学部生の参加人数が少ないので、看護学部の意見ばかり目立ってしまうから。
	でも時間が短かった。
4の理由	医学部と看護学部の考え方が違ったから。
5の理由	様々な方面から学ぶことができた。
	けど、人数が少なすぎると思いました。
	医学部（医者）からの視点での意見は必要であると思う。
	医師と看護師、両方の立場から意見を共有し学び合えることができるから。
将来、医師・看護師間で討議することは多く、重要なことだと思うから。	
私は熱心に授業に参加した	
3の理由	今回の主旨がよく分からない。
4の理由	もっと話し合う時間が欲しかった。
	課題に、自分の意見が言えた。
5の理由	意見は少し言えたと思う。
	医学部との交流が少ないから。
課題学習に対して熱心に取り組むことができたから。	
よく話し合えたと思う。看護学部生同士の意見が主だったが。	



グループ分けが分かりづらく、医学部と看護学部との学生の比などを考慮してもらいたかったです。また、グループ討論の時間が少なかったので十分な議論が出来ませんでした。また、この様な機会があれば参加してみたいのですが、医学部も全員参加にするとして、人数を調整して下さい。

葛城ちゃんやんが発表がすばらかったです。解剖を頑張りたいです。

医学部も全員参加にした方が医学部の子がやりやすいと思います。

医学部も必修にしないのなら、折角一緒にやる意味がないと思います。

看護学部の学生が全員参加なら、医学部もそうした方が良いような気がします。

村田さんの発表が良かったです。とてもわかりやすく、法医学が少し身近に感じました。また、看護学部の人と話すことが出来て様々な意見を聞くことが出来てとても良かったです。

看護学部の学生が集まって1つ2つの作業をするので、将来のチーム医療の基礎作りになると思った。

看護学部の先輩の意見が聞けて新鮮でした。

医学部生と看護学部生での討論は、1年生の大東での実習で行いました。その後この様な実習を行うのは、特に良い機会だと思いません。ましてや、1年と2年を一緒にしても、やはり1年は戸惑ってしまいます……。しかも、医学部生は全く出席が、強制ではないため、参加しても仲間がいない、かなり孤独でした。参加するべきなのか、しないべきなのかがはっきりして頂きたいです。法医学、系統解剖、病理解剖についての議論を受けられたのは良かったです。討論も内容は良かったのですが、少しやりづらかったです……。看護学部の方と話すことで、より「患者さん本位」の考えを学ぶことが出来ました。

医学部の参加人数が少なすぎて、医学部の意見が取り入れられないグループがあったので、「合同授業」の意味がない気がした。

なぜ看護学部は必修で、医学部は任意なのであるか。人体解剖においてはどちらの学部にとっても大事な物ではないだろうか。

看護学部は授業の一部として、参加しなければならなかったのに、胃あがく部は自由参加だったからおかしくないか。

村田さんの発表が素晴らしかった。一限の間にいろんな事がありすぎて大変だった。もう少し討論する必要があると思う。中途半端だった。5限にやるのがいいなと思った。

やるなら全員参加させてやるべきだと思う。誕生日で分けるのはあんまり良くないと思う。

医学部の人と話せて良かった。

医学部と看護学部で自由参加と強制参加という違いがあり、集まりが悪くてなんか残念でした。時間もなくて話し合いもちゃんとしてできなかった。

解剖実施がどのように決定されていくのかが、何となくしか理解していなかった。で、医療者側としても意見をもちあわすから。

医学部の学生が少なかった為、交流の意味を感じられなかった。私たちよりも関わりが深いのに出席しないのは献体をされた方々に失礼だと思う。事例はとても興味深いもので、ディスカッションも面白かった。

医学部の1年生の出席率が悪く、残念だった。自分たちの班は看護学部6人に対し、医学部1名と、普段の授業と何ら変わらない状況だった。事例がわかりづらく、何を求めているかわからなかった。もっと話を深められる事例があった。その場で話をするには時間が短すぎると思う。医療者が献体を申し出るダイミングなど、とても大切なことだと思う。改めて考えたい。

この様な場を設けているのに、出席は自由にしてあるのはおかしいと思う。看護学部は出席している方に、医学部の方は不参加・途中退場などこの様な行動はおかしくないでしようか。また、先生方は授業が大切なのか、写真を取ることが大切なのか分からない。今後のチーム医療に対し不安を感じ、今回の場で学びはあまりなかったと感じた。

看護学部は必修で医学部は自由参加ということで、医学部と看護学部の人数の比がどうしてもきになりしまった。合同で、折角この様な時間を設けたのなら、もっと人数がいた方が意見交換が深まると感じた。

医学部の意見も聞けると思い、楽しみにしていたが、途中で入ってきて、すぐに帰ってしまったので、意見も聞けず、この授業の意味はあったのかと思った。私たちは看護学部は全員参加であるのに、医学部は自由で、勝手に帰ってしまうのであるならば、まじめに取り組んでいる医学部の子達にもいるかもしれないが、来年からはやらなくて良いと思う。ちょっと動いているのではないだろうか。医学部がいなくても討論できたので、知識を深めることが出来た。医学部の子達がこの様な気持ちであるならば、課題の事例の様に医師と看護師は連携出来ないと思うし、一緒に働きたくない。

医学部の人が途中で帰ってしまったりして、医学部の人と討論ができなかったので残念でした。看護師は患者さんだけでなく、その家族のケアもとても大切な看護の一つだと感じた。

自由参加だったなんて残念です。医学部との合同のことは、あまりない大切な機会だったので、全然人が少なくて、時間も短くて、少し期待はすれでした。

解剖をするのは医学（医学部）であるのに、医学部の参加が必須でないのは、少しおかしいかなと思った。

医学部も必修にするべきだと思う。

・法医学とは医学部しか学ばないことだと思っていたので、今回法医学などについて話が聞け、学べて良い機会であった。・家族を犠牲に出す事は簡単に決められない事だと改めて感じた。

看護学部と医学部の人数が同じになるようにして欲しい。

なぜ医学部の学生が全く参加していないのか？合同で学ぶ意味がないと思います。この状況が続くなら、来年はやる意味がない。

医学部の人の出席が少なかったで、やるならやる、やらないならやらないとはっきりした方が良かったと思います。事例については、この様なこと考えることはとても大事なことであると思います。

両学部の討論という面では、看護学部と医学部の人数に偏りがあり、せつかくの機会なのに医学部の意見があまり聞けなかった。より良いチーム医療を行うためには、両学部とも参加する必要があると思う。

話し合う事で発見できてること画たくさんあり、とても勉強になった。献体は医学の勉強の為に必要なことという考えが強かったけれど、講義を通して、献体に提供してくださった加増区の気持ちを理解し、サポートすることも、非常に大切であるということを知った。

任意だと誰も参加しないと思う。学生同士でしっかりと交流が出来ないのならば、行う事に対して意義があるとは思えない。

医学部生とあまり交流ができなかったと思います。

医学部の方も必修にすべきだと思う。

・医学部の人数が少なすぎて、看護学部の方が多くてバランスが悪かった。・医学部との話し合いのみにいまいと思つた。医学部も必修にして欲しい。

医学部の方の参加人数が少なすぎて残念だった。事例などの取り組みは良かった。

医学部が自由参加じゃ意味がないと思う。看護学部も必修に参加したい。

患者さんの死について考えられたと思う。

将来必ず告知する場面であらうが、患者さんや家族を第一に考えて告知できるようにしたいと思う。

法医学夜会様に関して、私たち看護学部は触れ合うことが少ない。なので、この様な機会を得られて良かった。

先生や医学部のお話を聞けて、とても良かった。医学部の方は自由参加と言われていたのに関わらず、看護学部は、何も言われなかったのでもしかりして欲しいと思う。

もう少し分け方を考慮して欲しい（看護学生のみ、医学生のみという所があった。）

とても良い勉強になりました。

医学部の参加が自由参加であったことは、残念だと思いました。看護師の立場からの考えが多かった為、もっと医師の立場からの意見や考えを聞きたかったです。来年からは、医学部も全員参加にすべきだと思います。

看護学部は必修で医学部は自由参加というのはおかしいと思った。実際に解剖実習を行うのは、医学部の方が多いいのに、参加しないのは変だと思う。

「贈り物」という資料を読んで、様子を提示する方々の気持ちを知ることが出来た。医学部生の参加が少なく、対等な意見を交換出来たのが疑問に思った。また、解剖学により多く関わる医学生が今回の講義に参加していないことに対して、医学部の解剖学に対する姿勢をお疑問に思った。

看護学部だけが強制というのはどうかと思う。機会をつくるにしているとは思えない。

献体についてよくわかったし、法医学看護学があることをはじめに知りました。

第4章 看護学部を取り組み

1. GP 教育委員会取り組み経過

1-1 看護学部取り組み経過

本取り組みは、医療実践の中で組織・社会を主導することのできる女性医療人を育成するために、学生が在学中から医療人としてのキャリアおよび女性のライフサイクルを知り、自己のキャリアを考えながら、医療チームの中で協働しながらそれぞれの役割でリーダーシップを執る力を育成する教育を行うことを目指している。本取組におけるリーダーとは、目的を実現するための見通しを持ち、その上で個人や集団にかかわることのできる人材である。そのために自己理解、他者理解を基礎としたコミュニケーション能力と専門職者としての問題解決能力を育成する。自己変容をアウトカムとして評価することにより教育効果の評価を行う。

看護学部では質の高い教育 GP への申請から現在まで、看護学部委員会のひとつである、教育 GP 委員会が進めている。平成 20 年の委員は水野敏子、佐藤紀子、臼井雅美、海老澤睦、中田晴美、ラウ優紀子である。平成 21 年度から開催される、キャリア発達論 I の円滑な授業を展開するために、科目担当者の山元由美子教授が後期から参加している。

主に平成 20 年度は、準備期間とし取組の方法を検討、平成 21 年度から取組を開始した。平成 21 年度は、看護学部の新カリキュラムが開始される時期であり、本取組を新カリキュラムの新設科目「キャリア発達論」として開講することになった。「キャリア発達論」は 1 年次から 4 年次までのカリキュラムとして縦断的に学習が深化するように考案された。目的、内容は以下の通りである。

キャリア発達論（I～IV）

1. 目的

1 年次から 4 年次までの学習を通して、看護職として自己目標を定め、広い領域でリーダーシップを発揮し、生涯研鑽を積むことができる基礎能力を養う。

- 1)生涯発達させる自己のキャリアについての展望を持つ
- 2)女性が多い環境において協働する力を持つ
- 3)女性医療人として協働を主導できるキャリアを構築する力と意欲を持つ

2. 内容

- (ア) 看護学部・医学部合同授業からリーダーシップについて能力を習得する授業
- (イ) 看護学部 4 学年の学年を超えた取組からリーダーシップ・フォロアーシップとしての参加能力や問題解決能力を習得する授業
- (ウ) 看護学各キャリア教育を段階的学習し、キャリアを見通した上での職場選択を可能とする授業。

1-2 平成 20 年度の取り組み

上記の内容を縦断的に進めるために、各学年に科目責任者を配し、キャリア発達論科目責任者会議を継続的に開催した。1 年山元由美子教授、2 年水野敏子、3 年佐藤紀子教授、4 年金井 pak 雅子教授、運営統括責任者は水野敏子である。GP 委員会で具体的に検討された内容を、キャリア発達論科目責任者会議においてカリキュラムの全体的な視点から検討され、教授会で承認を得ながらすすめられた。その結果、資料 1 の授業概要となり、平成 21 年度に開始される 1 年次の授業は、資料 2 の通り構成された。看護学部「キャリア発達論」と、他のカリキュラムとの関連は図 2 に示す。

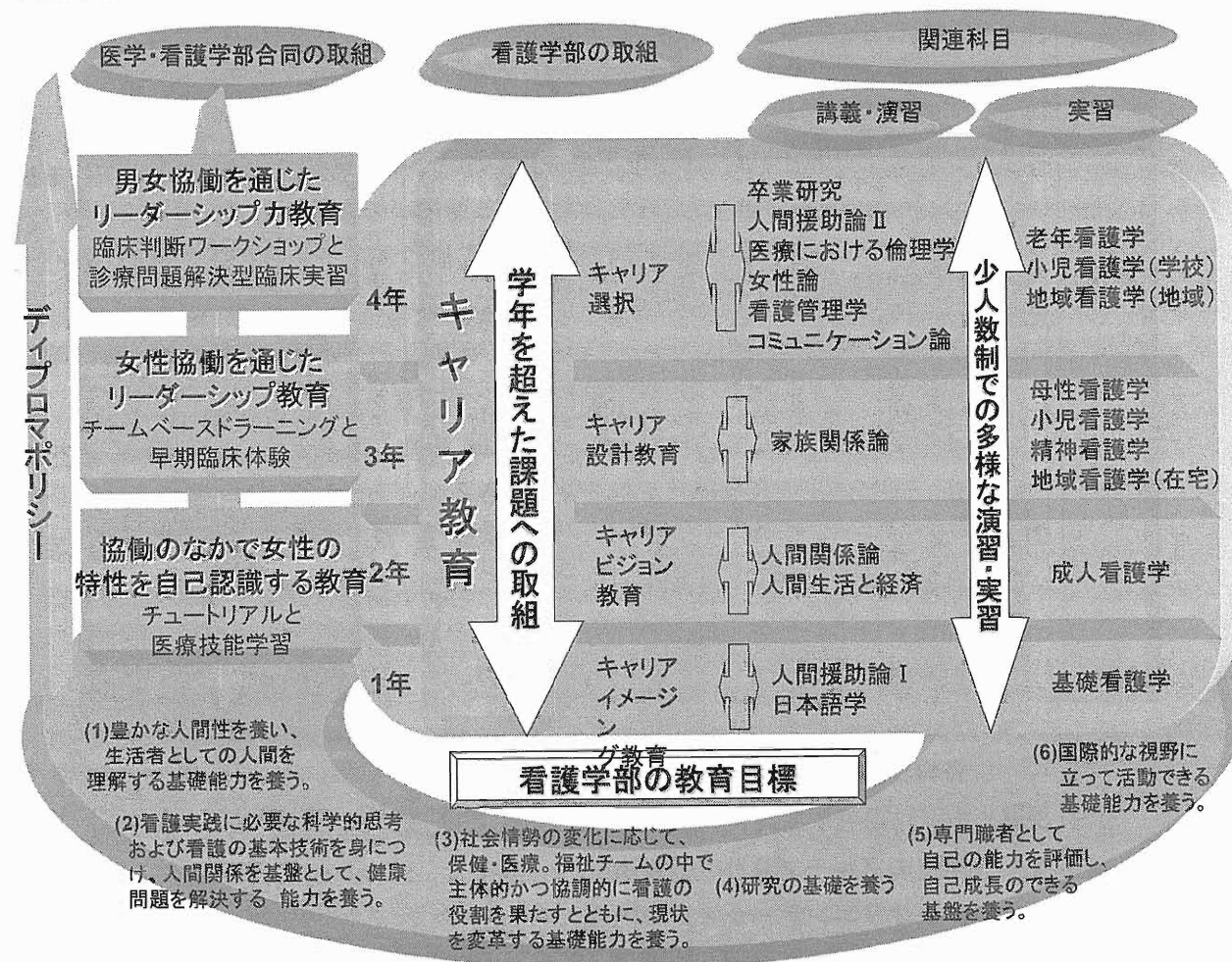


図1 看護学部の教育目標と授業とキャリア発達論との関連

1 年次に実施される「キャリア発達論Ⅰ」は、1) 食のフォーラムと調理実習、2) 医学部看護学部協働教育、3) NHR（学生交流会）4) CDPB（キャリアデベロップメント問題解決型学習）の 4 つの取組からなっている。1) ～3) は従来から実施されている内容であるため、主として 4) の CDPBL について検討を重ねた。なお、キャリアを以下のように定

義し進めることにした。

キャリアとは：看護職として働くことに対する意識や経験の蓄積を通して、自分の望む人生を生涯にわたって築いていくこと
自分の望む人生を歩むためには、今から自分はどのようなことを準備するのか、どのような道を選ぶかなどを考えながら勉強を進めていくことが大切である。

1. CDPBL (Career Development Problem-based Learning) 検討内容

1)目的：

- 1 年生：自分の意見を相手に伝えるように話すことができる。
相手の意見を聞くことができる
PBL の取り組み方が分かる
目的に向かって意見を集約する態度ができる
- 2 年生：自分の意見を述べるだけでなく、他のメンバーの意見を聞きメンバー間の相互理解を深めることができる
- 3 年生：共通の目標に向かって効率よく活動しあうように、計画的・意図的にグループメンバーに関わるることができる
- 4 年生：共通の目標に向かって、効率よく活動しあうように、意図的にグループリーダーを支えることができる。

2)方法

課題：複数のテーマを半年かけて提出
課題の設定の仕方、提示の仕方
取り組み方の提示
まとめ・発表方法の提示
資料作成

3)進め方

学生のグループ分け 場所
学生オリエンテーションの内容
教員の関わり方とオリエンテーション内容と資料
大東キャンパス学生と河田キャンパス教員との遠隔会議システムの導入と整備について

4) 評価方法の検討

CDPBL の目標と評価を、以下に図示した。

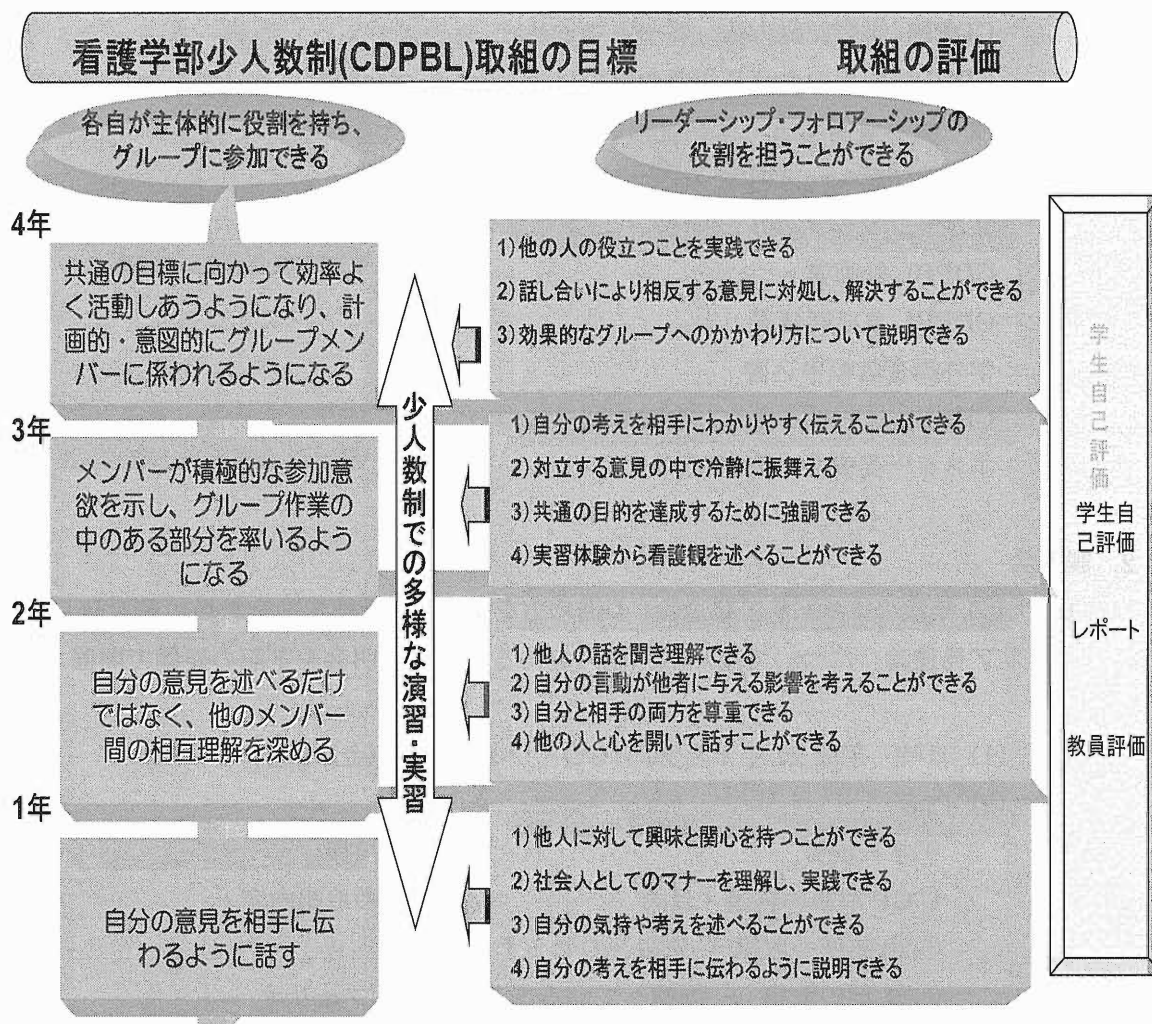


図2 少人数制 (CDPBL) 取り組みの目標と評価

5) 準備

ポートフォリオの作成

教員の準備

CD 委員会の組織と科目責任者の分担

(1) 新教育カリキュラムの開発と評価方法の開発

ポートフォリオの作成

学生へのフィードバック

(2) 教員の研修・教育

(3) FD 委員会との連携

- 6) 上記の内容について検討し、以下にあるキャリア発達論Ⅰの資料を作成した。
- CDPBL (Career Development Problem-based Learning) の進め方 (学生用)
 - CDPBL (Career Development Problem-based Learning) の進め方 (教員用)
 - CDPBL 学習記録方法 ポートフォリオ
 - CDPBL で用いられる用語の解説
 - 取り組み事例
 - CDPBL グループ別テーマと今後の予定
 - グループワークのルール
 - CDPBL 計画書
 - CDPBL 自己評価表
 - 学外調査依頼申込書
 - CDPBL におけるテレビ会議の利用について
 - ポスター発表会と表彰について

2. 説明会

- 1) 以上1年次の「キャリア発達論」の進め方を検討後、看護学部全教員に新設科目「キャリア発達論」について周知し、協力を得るために説明会を下記の要領で開催した。

(1) 日時 平成21年1月20日(火)、 1月30日(金)の昼休み

(2) 内容

- | | |
|--------------------------|-----------|
| ①学長挨拶 | ②学部長挨拶 |
| ③GP 取組の経過・目的 | ④4年間の取組内容 |
| ⑤20年度の取組・・・先輩とのセミナー | |
| ⑥21年の取組 準備していること ポートフォリオ | |

- 2) その後、実際に CDPBL を担当する 15 名の教員に対して説明会を 3 回開催し、授業の進め方について共通認識を持つように話し合った。

(1) 第1回担当者（オリエンテーション）会議

平成21年3月24日（火）15：15～17：00

CDPBL の進め方、教材、評価等について説明

担当者はチューターとして進めることについて説明

(2) 第2回担当者会議

平成21年4月24日(金) 14：30～16：00

主に学生の到達度、到達内容について意見交換した

(3) 第3回担当者会議

5月にメール会議を行い、進め方の微調整を行い徹底を図った。

なお、3月にはFD委員会が看護学部全教員に対して医学部吉岡俊正教授によるティュートリアル教育について講義と実演を交えた研修会を実施し、CDPBLにおける教員のティューターとしての関わり方について理解を深めた。また、科目担当者には、本学で毎年実施されているティューター養成プログラムに参加を呼びかけ、担当教員の半数が受講しティューター体験を通して学習した。研修は平成21年度5月と6月に2日間ずつ実施された。

さらに、平成21年度1月20日、30日に「大学教育改革プログラム合同フォーラム」において、ポスターセッションが開催され、本学のポスターセッションに高い評価が得られ、他大学からの質問が多くあり、活発な意見交換が行われた。

1-3 平成 21 年度の取り組み

平成 21 年度は、運営組織を以下のように取り決め進めた。GP 委員は水野敏子、金子眞理子、関森みゆき、ラウ優紀子、中田晴美、嵐弘美である。科目責任者として山元由美子教授が加わり進めて行った。

1. 運営組織

- 1) CD (キャリアデベロップメント) 委員会発足を予定しているが、それまで、科目責任者と GP 委員会の合同で検討する
- 2) CD 委員会の組織と科目責任者の分担
 - 1) 科目責任者 22 年度教材予算作成
カリキュラム実施、運営
 - 2) CD 委員会分担
 - (1) 新教育カリキュラムの開発と評価方法の開発 (20 年度スミ)
 - (2) 教員の研修・教育
 - (3) GP としてのセミナーや講習会、実績紹介
 - (4) 報告書
 - (5) GP 予算作成

2. CDPBL

平成 20 年度に作成され計画に基づき担当教員説明会開催、5 月から開催される学生向けオリエンテーションの準備、発表会、表彰の準備や 2 回の教員評価会議を実施した。

3. その他平成 21 年度に実施された 1) 食のフォーラムと調理実習、2) 医学部看護学部協働教育、3) NHR (学生交流会) については平成 20 年度の実績に基づき、各取り決めごとに担当教員を決め例年通り実施された。

3. 平成 20 年度からキャリアセミナーを河和田町キャンパスにおいて 2 年から 4 年次向けに開催された。様々な資格を生かし、多方面で活躍している本学部卒業生に講演を依頼し現在の自己のキャリアについて語ってもらった後、卒業生と在校生によるグループワークを行った。在校生が自分の将来の看護師像や看護観を考える機会となり、将来についての不安が軽減され、キャリアに対するモチベーションを高めることにつながっていた。

4. 医学部協働教育

1 年次の医学部・看護学部協働教育(共同テュートリアル/医療技能実習)を例年通り、合同生命倫理ワークショップトライアル、解剖慰霊祭合同学習、医学部看護学部実習合同カンファレンスを今年度から実施した。次年度はチーム医療/患者様との対話を追加実施予

定である。

5. 平成 21 年度報告書作成

6. 平成 22 年度 5 月「米国における看護職の職場選択とキャリア形成」の講演開催準備

以上が、平成 21 年度の実施である。実施最終年度となる平成 22 年度は、海外の看護職キャリア発達の講演会開催、卒業生のキャリアセミナーの開催、医学部との協働教育の推進、最終年度報告書の作成を進める。キャリア発達論Ⅰは資料に示したような成果を上げることができた。しかし、キャリア発達論の構成内容が複雑であること、多くの教員が 4 年間関わる必要があること、GP 取り組みと科目担当者は分離すべきである等の意見が教務委員会から提案され教授会承認により、1 年から 4 年までのキャリア発達論Ⅰ～Ⅳまでを 1 人の教員が科目責任者になり、内容を変更し平成 22 年度から新体制で進めることになった。

キャリア発達論 学習概要（案）（2009年より正課として各学年15コマ予定）

全体	<p>1年次から4年次までの学習を通して、看護職として自己目標を定め、広い領域でリーダーシップを発揮し、生涯研鑽を積むことができる基礎的能力を養う</p> <ol style="list-style-type: none"> 1) 生涯発展させる自己のキャリアについての展望を持つ 2) 女性が多い環境において協働する力を持つ 3) 女性医療人として協働を主導できるキャリアを構築する力と意欲を持つ <p>授業は以下の3部分からなる。</p> <p>一つは看護学部・医学部合同授業からリーダーシップについて能力を習得する授業。</p> <p>二つ目は看護学部4学年の学年を超えた取組からリーダーシップ、フォロアーシップとしての参加能力や問題解決能力を習得する授業。</p> <p>三つ目は看護学部各学年でキャリア発達の取組により自己のキャリア目標を定める授業である。</p>
1年生	<p>先輩看護職のキャリアを学び、看護師のキャリアについて具体的なイメージをもつことや、医学部との交流を通して協働についての態度を養い、これらを通して、キャリアや協働についての基礎的能力を習得する。4学年合同による取組では課題解決能力の育成やフォロアーシップとしての参加能力を習得する。またキャリア発達の基盤となるセルフケア能力や自己開発能力を身につける。</p>
2年生	<p>セルフケアについて評価修正し、自己開発能力を養うと共に、多様な職種のキャリアモデルから自己のキャリアビジョンを展望する。それに加え医学部との合同授業により医療対話入門による医療問題解学習から、女性協働を通じたリーダーシップについて学ぶ。4学年合同授業ではフォロアーシップとして問題解決に向けた参加のあり様を習得する。</p>
3年生	<p>セルフケア能力について最終評価を行い、今後の生活への方針を持つことを通して自己開発能力を高める。様々なライフサイクルにある先輩看護師のキャリアモデルから自己のワークライフバランスを考慮したキャリア設計を行う。4学年合同授業では3年生が核となり後輩や先輩の力をまとめながら課題解決をおこなう。この取組を通してリーダーシップの力が涵養される。</p>
4年生	<p>看護専門職として必要な管理の基本理論、サービス管理、政策等を学び看護職としてリーダーシップが発揮できる能力を習得する。さらに医療チームの一員として協働的活動に積極的に参加し、4学年合同の取組においても3年生をフォローし、課題解決に向けて参画する能力を習得する。</p>

キャリア発達論(修正前)

	1年	2年	3年	4年
コア				
看護1	女性医療人にかかわる問題発見解決学習、TA、技術演習を通じて両学部とのコミュニケーションの促進	女性協働を通じたリーダーシップ教育（医療対話入門による医療問題発見解決学習、TBL）	4学年合同による課題への取組(各学年2名程度の組み合わせによるチームで複数あるテーマの中からひとつ選択し、2年間かけてまとめ、発表する)	男女共同を通じたリーダーシップ教育(チーム医療事例に基づく合同問題発見解決学習、TA)
看護2	女性医療人にかかわる問題発見解決学習、TA、技術演習を通じて両学部とのコミュニケーションの促進	女性協働を通じたリーダーシップ教育（医療対話入門による医療問題発見解決学習、TBL）	同上	男女共同を通じたリーダーシップ教育(チーム医療事例に基づく合同問題発見解決学習、TA)
3	4学年合同による課題への取組(各学年2名程度の組み合わせによるチームで複数あるテーマの中からひとつ選択し、1年間かけてまとめ、発表する)	4学年合同による課題への取組(各学年2名程度の組み合わせによるチームで複数あるテーマの中からひとつ選択し、1年間かけてまとめ、発表する)	同上	4学年合同による課題への取組(各学年2名程度の組み合わせによるチームで複数あるテーマの中からひとつ選択し、1年間かけてまとめ、発表する)
4	同上	同上	同上	同上
5	同上	同上	同上	同上
看護6	同上	同上	同上	同上
看護7	同上	同上	同上	同上
看護8	同上	同上	同上	同上
9	同上	同上	多様なライフサイクルにあるキャリアモデルからキャリア設計する(結婚、子育て中、終了後、退職後のキャリアモデル他)	同上
10	同上	同上	多様なライフサイクルにあるキャリアモデルからキャリア設計する(結婚、子育て中、終了後、退職後のキャリアモデル他)	同上
11	各学年 実習病棟の看護士とのワークショップにより看護を提供する場を理解し自己の将来を考える	多様な職種のカリキュラムモデルとワークショップからキャリアビジョンを持つ(海外で働く看護師モデル、災害時に活躍した保健師モデル他)	看護の組織	看護サービス
12	実習病棟の看護士とのワークショップにより看護を提供する場を理解し自己の将来を考える	多様な職種のカリキュラムモデルとワークショップからキャリアビジョンを持つ(海外で働く看護師モデル、災害時に活躍した保健師モデル他)	看護の組織	マネジメント
13	社会 食に関するワークショップ		看護サービス	変化を起こす
14	食に関するワークショップ	調理指導・栄養相談		政策と看護
15	授業 調理指導・栄養相談	食事自己管理評価師	食事自己管理評価師	政策と看護

キャリア発達論(修正後)

キャリア発達論(修正後)		1年	2年	3年	4年
1	看護 医学 部合 同	キャリア発達論オリエンテーション キャリアとは、 キャリアアイメージングする	女性協働を通じたリーダーシップ教育 (医療対話入門による医療問題発見解決学習、TBL)	3学年合同による課題への取組(各学年2名程度の組み合わせによるチームで複数あるテーマの中からひとつ選択し、2年間かけてまとめ、発表する)	男女共同を通じたリーダーシップ力教育(チーム医療事例に基づく合同問題発見解決学習、TA)
2		女性医療人にかかわる問題発見解決学習、TA技術演習を通じて同学部とのコミュニケーションの促進		同上	
3			2学年合同による課題への取組(各学年2名程度の組み合わせによるチームで複数あるテーマの中からひとつ選択し、1年間かけてまとめ、発表する)	同上	4学年合同による課題への取組(各学年2名程度の組み合わせによるチームで複数あるテーマの中からひとつ選択し、1年間かけてまとめ、発表する)
4			同上	同上	同上
5	看護 学部 4学 合 同 業 CD PBL	1学年15Gグループによる課題への取組(チームで複数あるテーマの中からひとつ選択し、1年間かけてまとめ、発表する)5/29	同上	同上	同上
6		同上 2009/5/29	同上	同上	同上
7		同上 看護学部ヒューマンリレーションズ	同上	同上	同上
8		同上	同上	同上	同上
9		自己学習	同上	多様なライフサイクルにあるキャリアモデルからキャリア設計する(結婚、子育て中、終了後、退職後のキャリアモデル他)	同上
10		同上	同上	多様なライフサイクルにあるキャリアモデルからキャリア設計する(結婚、子育て中、終了後、退職後のキャリアモデル他)	同上
11		9月発表会	多様な職種のキャリアモデルとのワークショップからキャリアビジョンを持つ((海外で働く看護師モデル、災害時に活躍した保健師モデル他)		看護サービス
12	各学 年授 業・ キャリア 教育	同上	多様な職種のキャリアモデルとのワークショップからキャリアビジョンを持つ((海外で働く看護師モデル、災害時に活躍した保健師モデル他)		マネジメント
13		食に関するフォーラム		看護の組織	変化を起こす
14		食に関するフォーラム		看護の組織	政策と看護
15		調理指導・栄養相談		看護サービス	政策と看護

キャリア発達論 コマ数に対応した内容(4年間のシミュレーション)

年度	コマ数	内容	日程	時間	G数	場所	その他
21年度	1	オリエンテーション	4月		1年生		
	2・3	CDPBL課題取組	5月29日	9:10-12:10	15	大東	各代表1名がリーダーシップを執り、他はフオロアーとして役割を取る
	4・5	NHR	5月29日	12:10-16:00	大東	15G代表の内の5名が交流会企画に参加	
	6・7	自主学習			15	大東	15G代表を中心に取り組み組む(15名は毎年選出)
	8・9	CDPBL発表会	10月	12:10-16:00	15	大東	15G代表を中心に取り組み組む
	10・11・12	医学部看護学部交流会	9月			大東	事前演習・看護体験、ミニチュートリアル
	13	食のフォーラム					
	14・15	調理実習・栄養指導	10月	12:10-16:00			
22年度			1年生			2年生	
	1・2	CDPBL課題取組	5月末金	9:10-12:10	28	河田	各代表1名がリーダーシップを執り、他はフオロアーとして役割を取る
	3・4	NHR	5月末金	12:10-16:00	河田	15G代表の内の5名が交流会企画に参加	
	5・6	自主学習			28	河田	15G代表を中心に取り組み組む
	7・8	CDPBL発表会	10月	12:10-16:00	28	河田	15G代表を中心に取り組み組む
	9・10・11	1年 医学部看護学部交流会(1年)			9・10・11	医療実践の問題解決学習(2年)	
	12	1年 オリエンテーション(1年)			12・13	多様な職種の看護職のワークショップ(2年)	
	13	食のフォーラム(1年)			14・15	多様な職種の看護職のワークショップ(2年)	
	14・15	調理実習・栄養指導(1年)					
23年度			1年生			2年生	3年生
	1・2・3	CDPBL課題取組	5月	11:00-16:30	34	河田	各代表1名がリーダーシップを執り、他はフオロアーとして役割を取る
	4・5・6	自主学習			河田	15G代表を中心に取り組み組む	
	7・8	CDPBL発表会	10月	13:00-16:00	34	河田	15G代表を中心に取り組み組む
	9・10・11	1年生			2年生		3年生
	12・13	1年生			2年生		3年生
	14・15	1年生			2年生		3年生
24年度			1年生			2年生	3年生
	1・2・3	CDPBL課題取組	5月	11:00-16:30	45	河田	各代表1名がリーダーシップを執り、他はフオロアーとして役割を取る
	4・5・6	自主学習			河田	15G代表を中心に取り組み組む	
	7・8	CDPBL発表会	10月	13:00-16:00	45	河田	15G代表を中心に取り組み組む
	9・10・11	1年生			2年生		3年生
	12・13	1年生			2年生		3年生
	14・15	1年生			2年生		3年生
			2年生			3年生	4年生
			3年生			4年生	
			4年生				

CDPBL: キャリア発達論プロジェクト・チュートリアル

NHR: 看護学部ヒューマンリレーションズ

「質の高い大学教育推進プログラム」 教育GP 説明会

2009/1/20・30

特色ある教育プログラム開発委員会
(教育GP委員会)



水野 敏子
佐藤 紀子
臼井 雅美
海老澤 睦
中田 晴美
ラウ優紀子

教育GPとは



- 「GP」とは「優れた取組」を表す「Good Practice」の頭文字をとった通称
- 文部科学省が、組織的運用により教育の向上に向けた取り組みを支援するとともに、広く社会に情報提供を行うための取組
- 大学改革の取組が一層推進されるよう、大学での個性・特色ある優れた取組を選定している。
- 各取り組みは、Webサイトや各種印刷物等を活用し、取組の内容、経過、成果等について広く社会に情報提供を行い、高等教育全体の一つの財産とすることができる。
- 本取組は各領域を超えて、意見交換する中でより質の高い教育を学部で実践することをねらいとしている

大学教育改革プログラム合同フォーラム

ポスターセッション 2009/1/12



東京女子医科大学
Tokyo Women's Medical University

Together, Working to make Medicine Universal



医学部・看護学部

女性医療リーダー育成をめざす
全学横断教育

取組の中心テーマ

女性医療人が医療のさまざまな分野において
主導者としてリーダーシップを発揮できる
人間形成と専門職意識形成を目指す

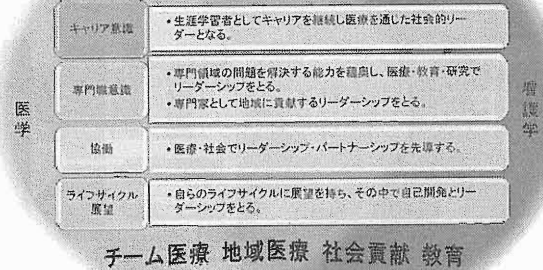
【キーワード】

リーダーシップ・協働・キャリア
アウトカム評価・チームベーストレーニング

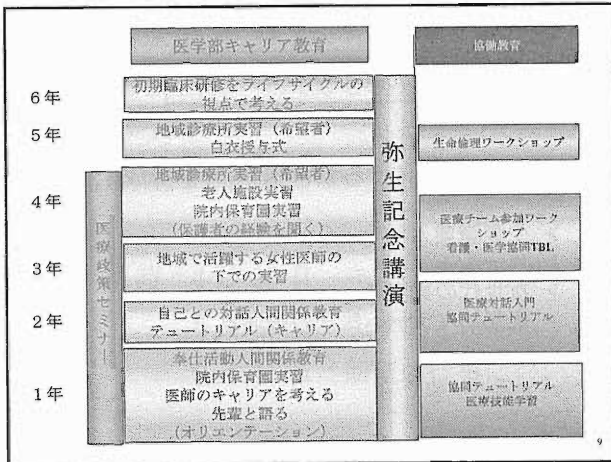
7

取組の概要と目指すもの

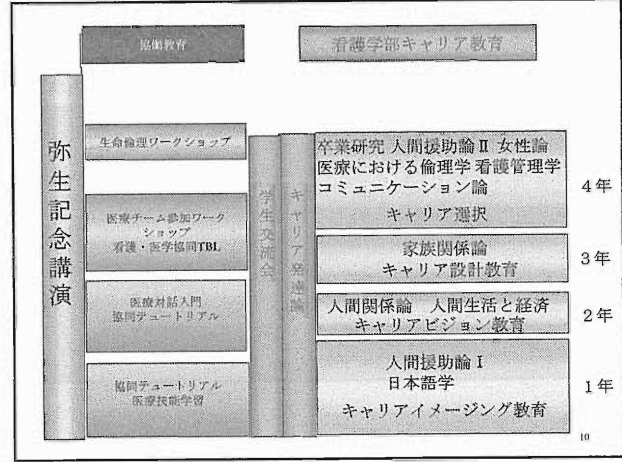
リーダーシップ育成



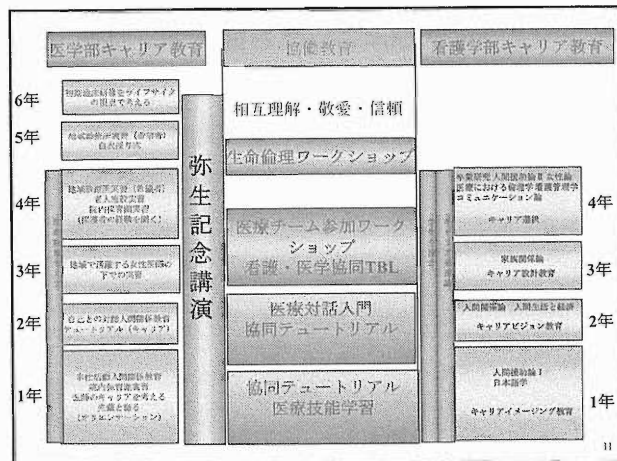
8



9

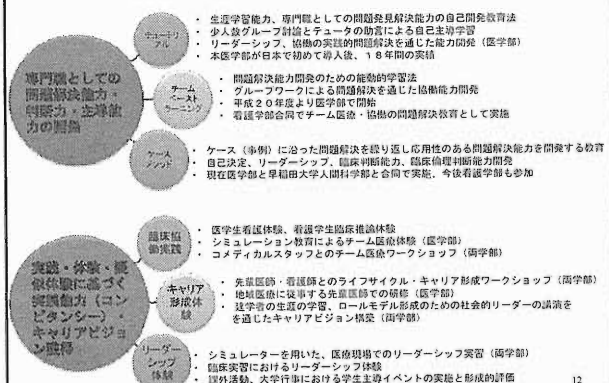


10

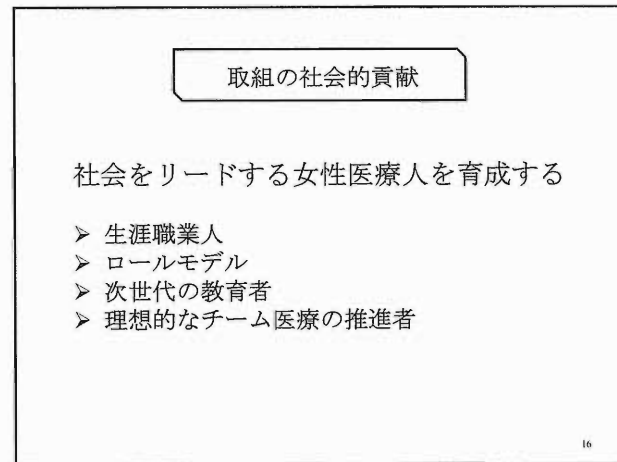
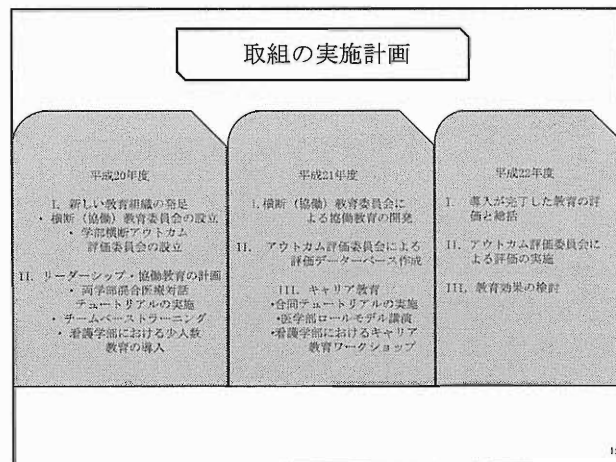
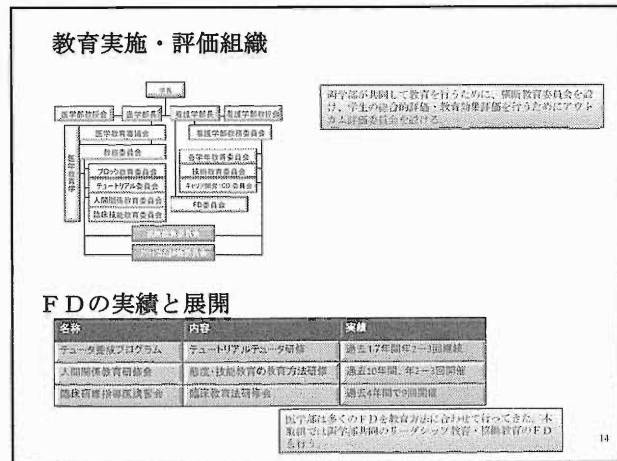
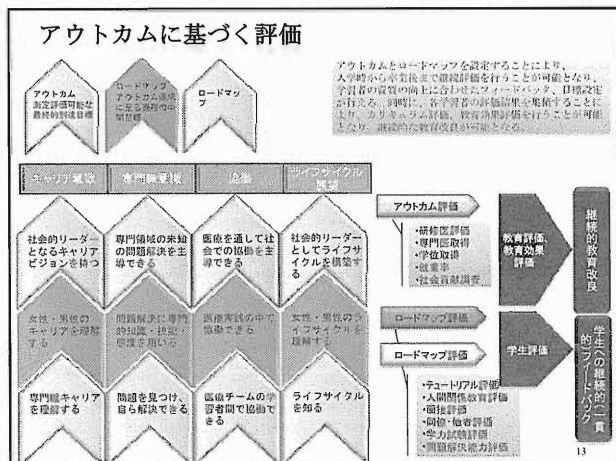


11

取組に導入される先進的教育方法



12



2. キャリア発達論Ⅰ キャリア・イメージング教育

1) 目的

キャリアとは、「看護職として働くことに対する意識や経験の蓄積を通して、自分の望む人生を生涯にわたって築いていくこと」と定義した。看護者としてのその一歩を踏み出した学生が、先輩とのかかわりでキャリアについて学び、看護者としてのキャリアについて具体的なイメージを持つことを目的にした。

2) 方法

今回、キャリアをできるだけ具体的にイメージできるように以下の方策を試みた。

- (1)看護者の先輩である教員がキャリアをどのように積み重ねて今日に至ったかと、キャリアに影響を与える因子について具体的な話をする。
- (2)東京女子医科大学病院で働く看護者のキャリアについて紹介する。
- (3)看護学部の交流会を通して2・4年生の先輩の学生からキャリアについて話を聞く機会を持つ。
- (4)助産師の仕事についての説明を、開業助産師に聞く機会を持つ。

日時：4月23日 キャリア発達論オリエンテーション 方法(1)(2)

5月29日 キャリア発達論 人間関係教育 方法(3)

6月11日 助産の仕事についての講義 方法(4)

3) 評価・効果

このように、看護者としてのキャリアにイメージができるような機会を持った結果、学生全員にキャリアのイメージについての調査はしていないが、キャリアとは何かについて考える機会になった。先輩看護者から話を聞きたい、保健師の仕事はどのようなものか、助産師の仕事についてもっと知りたいので助産所を見学したいなどの希望に結びついた。

2～3年次を対象に卒業した先輩(看護師、専門看護師、保健師、助産師、養護教員)に話を聞く期間を設けているので、さらにキャリアを積むことの意義について考えるチャンスになると考える。

3. キャリア発達論Ⅰ 食のフォーラムと調理実習

1) 目的

- (1) 食のフォーラムを通して健康に生活するために必要な食事を理解し、食事づくりの基本を学ぶ。
- (2) 調理実習を通して調理法を学び、食事づくりへの意欲を高める。
- (3) 上記から食の自立を確立する。

2) 学習目標

- (1) 食事は健康体維持のために必要であることを理解できる。
- (2) 自身にとって必要な栄養素や食品の量がわかる。
- (3) バランスの良い食事を献立することができる。
- (4) 調理することの楽しさを認識することができる。
- (5) 仲間と一緒に共同作業で作った料理を食べることにより、食事の楽しさを感じられる。

3) 実施

3-1 栄養士による食のフォーラム

(1) 日時・場所

平成 21 年年 5 月 7 日（木） V 時限 看護学部大東キャンパス 大教室

(2) 講義内容

- ①「食べる」とはどういうことなのか
- ②どんなものを食べたらよいのか
- ③食材の選び方
- ④バランスの良い組み合わせと食べ方
- ⑤安心して食べるための衛生面の知識

(3) 評価・効果

学生のレポートにおいて以下の意見が出た。

- ①食事は空腹を満たすための行為だけではなく、栄養を摂取する大きな手段が食事であることを忘れてはいけないと考えた。
- ②1日にどのくらいの量を摂取するとバランスの良い食事なのかが、わかるようになった。
- ③衛生面に気を配ることが第一だと思った。
- ④加熱することによって野菜の摂取が容易になることや、一工夫することによって食

べやすくなることを知った。看護師になるために学んでいる今、自分にとってだけでなく患者にとっても重要なことだと理解することができた。

- ⑤健康と食事の摂取が密接に関わっていることを知った。看護師は、常に患者と接しているのも、健康でなければいけない立場にある。ひとを看護する上で、私達は人一倍自分自身をケアしなくてはならない。
- ⑥主食・主菜・副菜だけでなく、乳製品や果物を摂ることが大事であることがわかった。
- ⑦一人暮らしから、食事も自己管理になり栄養が偏りがちである。日々の食事の積み重ねによって、自分の健康は自分で守ることをしっかり実行していこうと思った。
- ⑧食と調理の重要性が実感でき、これからの生活で実践しようという気持ちになった。

3-2 栄養士による調理実習

1) グループ編成

7～8名を1グループとし、さらに1グループを2つに分け、洋風料理担当と和風料理担当とした。

2) 日時・場所

A班 平成21年5月14日（木）Ⅰ～Ⅱ時限 看護学部大東キャンパス栄養実習室
B班 平成21年5月15日（金）Ⅰ～Ⅱ時限 看護学部大東キャンパス栄養実習室

3) 調理実習の内容

- (1) 皮なしシュウマイ
- (2) 青菜のかき卵汁
- (3) たたききゅうり
- (4) オレンジゼリー
- (5) 変わり冷や奴
- (6) ごはん
- (7) 魚のなべ照り焼き
- (8) かぼちゃサラダ
- (9) 洋風トン汁

4) 評価・効果

学生のレポートにおいて以下の意見が出た。

- ①今回のレシピで、いろいろな野菜の使い方がわかった。
- ②バランスのとれた食事が摂れるレシピを知った。
- ③一人だと料理は面倒だが、友達と作って食べることは楽しくて会話も弾み美味し

い。

- ④調味料を計量スプーンで量ることで、塩分や油分の過剰摂取が防げると思った。
- ⑤用意されていた食材を見て、鮮度を意識して選ぼうと思った。
- ⑥今まで買ってきたオレンジゼリーが簡単に美味しく作れ、調理は楽しいと感じた。
- ⑦豚汁に牛乳を加えることは考えたことも無かったが、まろやかになり美味しいしカルシウムも摂れることがわかった。
- ⑧野菜はレタスときゅうりのサラダで摂取していたけれど、かぼちゃのサラダもたききゅうりも簡単で美味しかった。自分の家でも作ってみようと思った。
- ⑨電子レンジは栄養素を守りながら、簡単にキャベツがゆでられ、シュウマイが蒸せられることを知った。

4) 評価・効果

学生の食の自立を目的とした本内容は2段階で構成されている。はじめに実施した食のフォーラムにより、学生は食事が健康な暮らしをするために重要であることや食事づくりの基本的な考え方を学んだ。その上で行った調理実習から、健康に生きるために必要な食事が簡単に作れ、その楽しさを知ることができた。概念を理解した上で実際の調理を行うことにより、食の自立へと速やかに方向付けることができた。

5) 取組の特徴

将来、看護師になる看護学生は、患者を支え看護するためには人間力を身に付けることが必要であり、人間力の基礎となる自立が求められる。自立の1つに食の自立が挙げられるが、学生の多くは初めての一人暮らしであり、健康に必須である食事づくりに長けた学生が少ない。学生が短時間で食の自立を得るためには、専門家である栄養士による指導が必須であると考え、栄養士によるフォーラムと調理実習を行ったことに特徴がある。

6) 実施までの準備

- (1)フォーラム・調理実習を指導してくださる栄養士を決定し、依頼した。
- (2)学習目的・学習目標を提示し、食のフォーラムの講義内容を決定した。
- (3)調理実習のグループ編成と献立を決定し、必要な食材や不足している調理用具の調達を行った。
- (4)フォーラムと調理実習の配布プリントを作成した。

7) 担当者

山元由美子 キャリア発達論Ⅰ科目責任者

伊東栄子「食のフォーラム」「調理実習」担当者

鈴木、山本：栄養士、桜田（学務課）：食材の受け取りと食材の下ごしらえの補助

4. キャリア発達論Ⅰ キャリア発達問題解決学習

(CDPBL : Career Development Problem-based Learning) の取り組み

1) 目的

変動する社会情勢の中で、看護者としての役割を認識し、チーム医療の場において主体的に自律した看護実践ができるようになるには、自分の考えや意見を明確にして他者に伝えること、相手の話を傾聴することが必要とされる。CDPBL では、課題達成に向けて、グループワークへ主体的に参加する意義と重要性についての理解を深めることを目的としている。

2) 方法

(1) 目的 グループワークのあり方について理解し、主体的に参加することができる。

(2) 目標 1. グループワークに主体的に参加することができる。

1) グループワークに主体的に取り組めるようグループワークに関するルールを遵守することができる。

2) 自分の意見を相手に伝わるように話すことができる。

3) 自分の意見が、少数意見であっても必ず発言することができる。

4) 他者の意見に耳を傾けることができる（ただし、他者の意見を一方的に批判しない）。

2. 課題達成にむけて積極的に取り組むことができる。

(3) 学習方法

1. グループでテーマを選択し、グループワークを主体的に進める。

2. 選択したテーマにおいて、解決すべき課題の発見、学習による知識の獲得、討論を通じた思考の深化、問題解決という過程を経た学習を行う。

3. 必要があればフィールドワークを行い、そこで生活している人々や働いている人々の活動などを通して学び（現状認識）を深める。

4. ポートフォリオを作成し、学習の記録を残す。

5. グループワーク成果を発表し、プレゼンテーションの方法について学ぶと共に、テーマに関する討論を通して、自己の学びを深める。

(1) グループワークで検討した内容については、示説（ポスター）にて発表する。

(2) 発表時に CDPBL 発表会用評価表を用いて、全員で評価する。

優勝者は大東キャンパス祭で発表し、表彰をする。

6. 凝縮ポートフォリオを各自で作成する。

(4) グループワークのルールの設定

メンバーで、グループワークを行う際のルールを決める。例えば、「開始時間・終了時間を厳守する」「飲食物の持ち込み禁止」「自分の意見は、少数意見であったとしても必ず発言する」などである。

ルールを決める際には、グループメンバーの同意が得られたものについて書き、ルールを必ず遵守する。また、グループワークを進めるうちに、ルールの遵守について悩んだ場合には、担当教員に随時相談する。

(5) グループワークメインテーマ

現代社会における課題と対策：

事例 1 身障者席で携帯をかけていた「ある日の車内」

事例 2 3 年前に脳出血後、軽い左半身マヒのある 87 歳の父親の運転「Cさんと父さん」

事例 3 終末期にある母親の小学生への告知「Dちゃんのある日のできごと」

事例 4 飲食店での喫煙の「飲食店にて」

事例 5 父親の介護で苦闘している息子の「介護について」

事例 6 外国人の雇用の「ブラジル人の P さん」

事例 7 結核問題の「ハリセンボンのはるかさん」

(6) 提出課題とその方法

CDPBL に必要な CDPBL 自己評価表や外部調査依頼書などは情報実習室内の指定されたパソコンにインストールされているので、これを活用して作成する。

(7) グループワークの報告書

①現状の分析

②課題の明確化

③今後の検討事項

(④フィールドワークについて)

(8) CDPBL 発表会とグループの発表内容の視点

1. 大・中教室および視聴覚室において、ポスターの発表を行う。

※1グループ持ち時間15分（発表時間8分、質疑応答7～8分）

2. 他のブロックのポスターも見回り、CDPBL発表会用評価用紙に記入し評価を行う。
配点は以下の項目各項目 20 点の計 100 点とする。担当教員は集計し学園祭で発表する。

1) 現状分析は客観的に十分行われている 2) テーマと発表内容に一貫性がある

3) 課題や対策が明確に述べられている 4) プレゼンテーションの方法は適切である

5) 発表内容は興味が持てた

(9)凝縮ポートフォリオ作成要領

CDPBL の過程（自己学習、グループディスカッション、発表会）を通して、グループで選択したテーマについて、終了時に各自レポートにまとめる。レポートは、①自分の考えを明確にすること、②エビデンスを必ず明記すること、③論理的でわかりやすい内容であること、④役立つ提案であること、という4点について考慮し作成すること。レポートは、指定の要領・提出方法に従って提出すること。

(10)CDPBL自己評価表提出

個人評価表は中間と終了時の2回評価し提出する。評価表の質問項目は

- 1)主体的なグループへの参加、
- 2)グループのルールの遵守、
- 3)相手にわかる話し方、
- 4)少数意見でも発言する、
- 5)他者の意見の傾聴、
- 6)総合評価

評点は A：大変よくできた、 B：よくできた C：できた D：努力が必要 の4段階で評価した。評価項目の評点の根拠は自由記載とする。

(11)教員のかかわり方・・・かかわり方のマニュアルを作成

1. 基本的に、各グループに教員が1名担当する。教員は、学生主体のグループワークのサポートの役割を担う。
2. CDPBL は、学生のグループ学習と自己学習で成り立つため、教員は学習内容を教えるのではなく、どうしてもグループワークが進まなくなった時に、学習のためのアドバイスを提示する。よって、積極的にグループでの議論を展開し、現在の課題を明確にした上で、教員にコンタクトをとるようにするとグループワークが円滑にすすむ。
3. 教員との連絡は、面談、e-mail、遠隔システムを利用することになる。連絡のとり方については、担当教員と相談のこと。なお、e-mail を送受信する際には、ウィルス対策のため、大東キャンパスおよび河田町キャンパス情報実習室内の PC を使用して送受信を行うこと。

(12)教員の研修

全教員を対象に、看護学部 of FD 委員会主催で以下の事を行う。

- 1) PBL の理解を深めるために、目的、方法について説明のあと、看護学部の学生の協力を得て医学部教員のティータ役で PBL の模擬授業をする。
- 2) 1 年次の CDPBL についての目的・方法、教員のかかわりについての説明を行う。
- 3) 希望の教員は医学部主催の PBL 研修に参加する。

3)実施

2009 年 4 月から 2009 年 10 月まで。具体的なスケジュールは表 1 に示す。

表1 スケジュール

日 程	内 容	備 考
4月23日(木)3限	キャリア発達論Ⅰ ガイダンス (山元) 1. CDPBLの進め方についての大枠説明 2. グループ分けの発表	ブレイク ストーミ ング
5月29日(金) 1・2限	キャリア発達論Ⅰ 講義・演習 1. CDPBLについて (水野) 2. グループワーク *グループのテーマ、目標、進め方、グループワークのルールおよびグループの代表(主に連絡係)などについて検討し、 CDPBL記録用紙1 を提出する。	
7月10日(金) 16:00まで	CDPBL計画書(記録用紙2) 提出 *テーマに関する現状の分析、課題の明確化、フィールドワーク状況(計画・結果)、今後の検討事項、グループワークのルール等をCDPBL計画書(記録用紙2)に記入し提出。 CDPBL自己評価表 提出 *各自、所定の様式(配布されたUSBにCDPBL自己評価表フォーマットを各自保存)に従い入力、「CDPBL自己評価表2009年中間」のタイトルで保存しておくこと。 *CDPBL自己評価表は、 <u>2部印刷</u> し提出のこと。	
9月24日(木) 2・3限	キャリア発達論Ⅰ 演習 *発表に向けてポスター作り(模造紙1~2枚程度) 9月29日(木)までにポスターを掲示しておく。	
9月30日(水) 3・4限	キャリア発達論Ⅰ CDPBL発表会 1. 大・中教室および視聴覚室において、ポスターの発表を行う。 ※1グループ持ち時間15分(発表時間8分、質疑応答7~8分) 2. プログラム予定 13:10~13:20 発表会に向けて(山元):大教室 *各発表場所への移動 13:30~14:45 ブロック毎発表(3ブロック) 13:30~13:45 13:45~14:00 14:00~14:15 14:15~14:30 14:30~14:45 14:45~14:55 休憩 14:55~15:45 他のブロックのポスターも見て回り、CDPBL発表会用評価用紙に記入し、評価を行う。 15:45~16:10 まとめ	
10月13日(火) 17:00まで	凝縮ポートフォリオ提出 *凝縮ポートフォリオ(A4用紙2枚以内)を各自で作成し、提出する。 CDPBL自己評価表 提出 *各自、所定の様式(配布されたUSBにCDPBL自己評価表フォーマットを各自保存)に従い入力、「CDPBL自己評価表2009年終了時」のタイトルで保存し2部印刷の上、 <u>USBと印刷したCDPBL評価表を提出。</u>	15G=5G ×3ブロッ クとする。 *グルー プのポス ターの前 には必ず 学生1名が 待機する
10月28日(日)	優秀チームの発表会	

4) 結果

対象は 89 名であった。テーマ毎の結果は以下の通りであった。

(1) グループワークの取組とポスター発表

① グループワークの取組

各グループで、5 回～8 回のグループワークを行った。当初は、取り組む課題を分担し調べていたが、グループメンバー全員が同じ課題について調べてくることの意味がわかってからは、同じ課題を調べても意見が異なるので視野が広がった、調べ方がわかったなどの意見が出されるようになった。

キャンパスが 2 つに分かれているために、半数の教員は遠隔 TV 会議でグループワークをサポートしたが、二重の予約や回線の調子が悪いことなどがあり、予定した回数のグループワークができないこともあった。遠隔 TV 会議ではカメラが固定されていたので相手の表情が見えず、状況を把握しにくかったなどの意見もあった。

② グループワークのポスターによる発表会

15 グループで、一つの課題に 2～3 グループが取り組み発表した。発表内容は、模造紙 2 枚に、課題、分析、結果、考察あるいは方向性について工夫を凝らしたまとめであった。発表はわかりやすく、要領よく発表していた。質疑応答も活発に行われていた。

外部の施設に調査をおこなったグループは、職業安定所、社会福祉事務所、緩和ケア病棟の専門看護師のインタビューの 3 箇所であった。インタビューした学生は、文献では得がたい情報や現実的な多くの課題や問題、病院でのインタビューでは看護のやりがい、目指す看護者のイメージができたなどの感想があった。

③ ポスターの評価と優秀ポスターの表彰

学生の投票による優秀ポスターは、1) 現状分析は客観的に十分行われている、2) テーマと発表内容に一貫性がある、3) 課題や対策が明確に述べられている、4) プレゼンテーションの方法は適切である、5) 発表内容は興味が持てた、について各項目 20 点配点の 100 点満点で全学生が採点をした。その結果を集計したところ各グループの評点は 89.7～78.2 点で、評点の平均は 81.6 点であった。以下の 1 位 89.7 点、2 位 87.6、3 位 85.5、4 位 85.4 までを表彰した。表彰の後、発表を行ったが、発表内容は洗練されて非常にわかりやすく、全員が傾聴していた。

④ 個人の取組（凝縮ポートフォリオ）

個人の凝縮ポートフォリオの内容は、CDPBL の過程（自己学習、グループディスカッション、発表会）を通して、グループで選択したテーマについて、終了時に各自レポートにまとめることになっていた。レポートは全学生が 4 つの視点、①自分の考えを明確にすること、②エビデンスを必ず明記すること、③論理的でわかりやすい内容であること、④

役立つ提案であること、を考慮し作成していた。特に、②エビデンスを必ず明記すること、④役立つ提案であることは、テーマに沿って具体的に記載してあった。この根拠となる文献は、図書館等で調べた文献を用いた学生は約 3/4 であった。インターネットのみを使用した約 1/4 の学生はインターネットの出展のみの記入も目立った。また、文献記載のない、あるいはインターネットの出展のないのは同じグループであったので教員のかかわりも影響していた。③論理的でわかりやすい内容であることについては、文献や調査等で学習した根拠は明確であるが現実の問題の結びつきが希薄であったのは、疾病との関係を取り扱った「がんの告知」「脳出血後の高齢者の運転」のテーマであった。①自分の考えを明確にすることには、この取組みの意図を書いている学生が主であった。

グループワークをした結果の主な意見は、グループワークの当初はどうしてよいかわからず不安であったが、「テーマが明確になると先が見えるようになった」、「同じテーマで調べたが内容が違ったり、意見が異なったりしたことで視野が広がった」、「知識が深まった」、「自分の意見が周囲にどのように受け入れられたかを知ることができた」などであった。

(2)個人の評価について

①個人の間と終了時の評価についての比較

個人の評価表は、A：大変よくできた を 4 点、D：努力が必要 を 1 点として換算をして中間と終了時の個人の評価表の比較をした。

いずれの項目も終了時の評価が中間の評価よりも平均点数は高かった（表 2）。最も平均点数が高かった項目は、中間、終了時とも「他者の意見の傾聴」であり、中間 3.81、終了後 3.91、最も低いのは「相手にわかる話し方」で、中間 3.01、終了後 3.44 であった。各評価項目の平均点数は、以下のとおりであった。評点の高い順に、「グループの規則の遵守」（中間 3.61、終了後 3.76）、「総合評価」（中間 3.38、終了後 3.65）、「グループへの主体的な参加」（中間 3.49、終了後 3.61）、「少数意見でも発言する」（中間 3.35、終了後 3.63）であった。

次に、中間と終了時評価の自己評価の比較をしたところ、有意差があったのは、「相手にわかる話し方」、「少数意見でも発言する」、「グループの規則の遵守」、「少数意見でも発言する」であった（表 3）。評点の根拠となる自由記載をカテゴリー化すると、有意差のあった「相手にわかる話し方」は、中間では《自分の考えを相手に伝えるのは困難》であったが、終了後は《相手に伝わるような話し方》と肯定的な意見が多かった。「少数意見でも発言する」は、中間では《少数意見でも発言する必要性》とルールに従った内容であったが、終了後は《メンバーの意見を聴くことでの視野の拡大》であった。「グループの規則の遵守」は《遅刻をしない、連絡をすること、発言する、の規則の遵守》、「傾聴」は《他者の意見の傾聴》であった。

表2 PBLの自己評価の中間・最終評価の平均

項目／評価	中間評価	最終評価
グループワークへの主体的な参加	3.50	3.58
ルールの厳守	3.61	3.74
相手に伝わる話し方	3.01	3.42
少数意見でも発言する	3.33	3.63
他者の意見を傾聴	3.80	3.90
総合	3.40	3.64

表3 PBLの自己評価の中間・最終評価の t 検定の結果

n = 89

	対応サンプルの差		有意確率 (両側)
	平均値	標準偏差	
グループへの主体的な参加 - @2グループへの主体的な参加	-0.112	0.756	0.163
ルールの厳守 - @2ルールの厳守	-0.157	0.685	0.032
相手に伝わる話し方 - @2相手に伝わる話し方	-0.438	0.82	0.000
少数意見でも発言 - @2少数意見でも発言	-0.281	0.734	0.000
他者の意見を傾聴 - @2他者の意見を傾聴	-0.101	0.475	0.046
総合 - @2総合	-0.244	0.664	0.001

p < 0.05

②評価項目の根拠内容の分類

各評価項目の根拠の自由記載を分類整理した結果、主な感想は以下であった。

「グループワークへの主体的な参加」

- ・市立図書に出かけて文献を探し、発表に向けて役割分担したことは積極的に参加した。
- ・各自で調べることに責任を持って調べ、共有できた。
- ・グループワークには最初から最後まで積極的に参加できた。
- ・発表が近づくに従い完成度の高い内容にしたいとの意識も高まり、積極的に参加できた。
- ・まかされた仕事以外にも気を配れるようになった。
- ・調べること、進行役も積極的にできた。
- ・お互いの情報を共有し全員が理解し次に進むことができた。
- ・意見が出ないとき進んで発言した。
- ・調べてきたことを「次の人お願いします」と声かけながらすすめたので円滑に進めることができた。

「グループワークのルールの遵守」

- ・時間を守ること、必要なコピーはコピーカードを使ってすることができた。
- ・反対意見も最後まで聞いた。

- ・欠席者に今後の予定や検討した内容を伝えた。
- ・早めに打ち合わせをすると最後にあわてなくて済んだ。
- ・決められたルールを無視すると相手に迷惑をかけるし、信頼を欠く。グループ内の空気を乱すのでルールは守れた。お互いに良い気持ちでグループワークをするにはルールを守ることは大切であった。
- ・時間厳守、発言ができた。
- ・一人ひとりが責任を持って調べた。
- ・時間厳守、連絡、役割分担したことが守れた。
- ・最初に決めたルールはみんなで守ることによりグループワークも円滑に進められた。

「相手に伝わるような話し方」

- ・お互い納得できるまで話し合った。
- ・発表のポスター作成時、与えられた作業ができない部分の援助を具体的に依頼し、引き受けてもらえた。
- ・知らない人に伝えるには、相手の顔を見て伝える必要性に気づいた。
- ・考えたことを相手に伝えるのは難しく、メンバーに理解してもらえない場面が数回あった。
- ・道筋を立てて順序良く話せた。
- ・自分のわからないところはあやふやなままに済ませないで質問し解決した。
- ・雰囲気もよくメンバーが良く聴いてくれたので話しやすかった。
- ・できるだけ聴きやすいように努力した。伝える工夫もした。
- ・調べたことを理解してもらえるように説明の工夫や絵を加えたので、不十分な説明部分を補った。
- ・グループメンバーは、理解できたかを確認しながら進めたし、聴く姿勢で参加したので、自分も伝える努力した。
- ・自分の言いたいことがずれたり、文章の前後が異なっていたりして、相手が理解できない部分があった。
- ・自分では相手に伝わるように心がけたが、自分の中で曖昧なものは、思うように伝わらないことが多々あった。
- ・メンバーは良く聴いてくれた。

「少数意見でも発言する」

- ・少数意見をきちんと聞いたら見えない問題が見えてきたので恐れずに発言することの大切さを感じた。
- ・少数意見を聞くことはルールになっていたのでできた。話し合いを繰り返すごとに発言ができ、人間関係も良くなった。

- ・少数意見でも聴くという雰囲気があったので、消極的な性格であったがみんなに聞いてもらえた。
- ・発言し解決することができた。
- ・相手の意見のほうがいいと考えたら最初に意見を聞き、その意見を尊重した。
- ・お互いの意見を尊重しながら発表内容の検討をした。
- ・疑問に思っていることの確認ができた。
- ・少数意見は間違いではないし、その意見により新たな疑問や解決への道が開けるので、少数意見でも発言できた。
- ・グループ内で意見の対立もあったがきちんと説明したのは、発言しやすい雰囲気があったからである。
- ・少数意見や多数意見を気にせず、自分で感じたことや自己学習での知識をふまえて伝えたが、その機会が少なかった。

「他者の意見を傾聴」

- ・相手が自分のために努力している姿を見て、相手の言っていることに耳を傾けないといけないと感じた。
- ・グループワークは自分の意見を伝えるだけでなく、相手の意見に耳を傾けることで進むことがわかった。
- ・一人ひとりの意見に耳を傾けることができるようになった。
- ・他のメンバーの意見を聞くことで視野が広がった。
- ・グループメンバーが話しているときにメンバーがそれを聞いていない場面があったので、自分はそれをしないようにしたい。
- ・自分も積極的に発言したが、人の話はさえぎらないようにした。
- ・相手の目を見て、聴いている態度を示しながら耳を傾けた。
- ・自分と違う意見にも理解する姿勢で接した。
- ・他者の意見に耳を傾けることで自分の意見との比較ができること、表現方法も異なるので学びになった。
- ・お互いに目を見ながらうなずきながら話を聴く、話すことができたので、何を言いたいのか理解をすることができた。
- ・相手の話を聴きながら、自分の意見や価値と照らし合わせて否定せずに聞いた。
- ・全員が発言できるように心がけた。他者が発言しているときは最後まで相手の話を聴いた。

「全体を通しての学び」

- ・単独では自分のペースで進めるが、グループワークは自分の意見を述べ相手の意見を聞くことで理解が深まったので、グループワークは学びが多く楽しく学べ、グループの

結束力が高まった。

- ・自分では考えられない意見を聞ける醍醐味を味わった。
- ・情報を鵜呑みにせず、その情報をいろいろな角度から調べ確かな情報を得ることで問題の確認に迫ることができる。情報から何が問題かを見抜く力をつける必要性を感じた。
- ・広い視野で物事も見ることが必要であると感じた。
- ・T Bについての知識が増えたが、知らない人に伝えるのに、図や表を用いる工夫をした。
- ・他のグループの発表を聞いて視野が広がった。
- ・これまでこれほど真剣に討論をしたことがなかった。目標に向けてメンバーが積極的に参加することでお互いに刺激になった。視野が広がった。
- ・グループワークの土台となる納得・信頼、聴く・話す、進行について学べた。
- ・グループメンバーが責任を持って調べてきたので話し合いが進み、信頼関係が持てた。
- ・メンバーがお互いにリーダーを体験することになっていたのが心配していたが、グループメンバーに助けられ役割を果たす体験ができた。今後に生かしたい。
- ・ルールがあったので自分の発言が少ないとき、メンバーは何かないかと聴いてくれたので発言できた。
- ・意見交換することで知識を高める、グループワークの必要性に気づけた。
- ・グループワークは多くの情報量もあり仕事も早く進めることができるが、情報を整理するのは難しい。
- ・情報を整理し、精選しながら相手にわかりやすく伝えるには図などの工夫が必要である。
- ・調べて発表しあうのはとても面白かった。
- ・話し合うことでさらに深く学ぶことができた。
- ・グループワークは個人で学ぶより難しいが、視野が広がり考えが深まるし、まったく違う人と一緒に学ぶことで得るものが多い。
- ・考えが一致しないときは歩み寄ることが必要とわかった。これはチーム医療の場でも役立つ。
- ・相手が意見を聞こうという姿勢があることで上手く説明できなくても伝えようという気持ちになった。
- ・グループワークは視点の違いがわかるので、さまざまな学習ができた。
- ・アンケートは調査人数により説得力が異なること、性別、年齢も調査が必要とわかった。
- ・今までは自分の意見を積極的に発言し、グループメンバーに少数意見をぶつけることもなかった。しかし、PBLでは、少数意見でもお互いに意見を述べ、聴きあうことでお互いに納得してより良い結論を出すことができた。
- ・意見を言わないことで大事故が起こりかねないこともわかったのもので、自分の意見を持ち、それを主張し、自分が主体的に参加することで中身の濃い充実したグループワークになると思った。

- ・この経験を生かして積極的にグループワークに参加したい。
- ・自分の意見を端的にまとめて伝えることは難しかった。
- ・自分の意見に自身がもてずに発言に躊躇したのは、医学部のチュートリアルするとき、医学部生の討論のスピードに圧倒されて、発言ができなかったのが尾を引いた。
- ・グループワークの方法やルール、発表のまとめ方や仕方、相手に伝える話し方を学んだ。
- ・発表は聴いてくれる人がいるので、わかりやすく、興味を持ってもらえるように工夫する必要を感じた。
- ・看護師は患者さんにどうすることが一番いいかを考えて行動すべきであると学んだ。

5) 評価・効果

今回の目的は、学生が看護者としての役割を認識しチーム医療の場において主体的に、自律した看護実践ができるようになるには、自分の考えや意見を明確にして他者に伝えること、相手の話を傾聴することが必要であるとして、学習の目的を「グループワークへの主体的な参加」とした。特に今回は、グループワークに主体的に参加するために、「相手に伝わるような話し方」、「少数意見でも発言する」、「他者の意見を傾聴」のルールをオリエンテーションし、グループによってはその振り返りをしたことで、主体的に参加することができた。その成果は、学生の自己評価による各項目の平均点も終了後の平均点が高く、主体的な参加をしたことで、「相手に伝わる話し方」、「少数意見でも発言する」、「少数意見を傾聴する」、「ルールの厳守」の項目は中間と終了時の比較でも有意差があったことからより深く学習ができたと推測できる。

学生は、同じ課題について調べたことをグループで共有することで、①考えの違いや視野が広がり知識が深化したこと、②意見を傾聴することの大切さ、③傾聴してもらえたことで自分の意見を述べることができたこと、などの成果があった。当初、グループワークはルールを意識した活動であったが、回を重ねるごとに建設的な発言が生まれ、グループメンバーとの気心があってきたことで、積極性が増したと考えられる。学生は、このメンバーに受け入れられたので安心して意見が出せた、居心地がよかったと述べている学生もいたのでチームメンバーに助けられて多くの学びができたと考えられる。このような条件が整うと、学生は主体的に参加できること、さらに、同じ課題を調べることで考えの違いや知識の幅が広がることを通して、文献に当たる必要性や学習の仕方を学ぶことができたと考えられる。大学に入学しても学び方が解らないと訴える学生は、当学部に限らず多くの大学で問題になっているが、課題を達成する中でグループワークに主体的に参加し、討議を通して思考の深化、課題を探究するという学習の方法を身につけたことが示唆された。

次に、取り組んだ結果の発表会を持ったことは、グループメンバーでまとめることの大切さや困難さ、相手にわかるようにまとめることやプレゼンテーションについての考える機会となった。特に、学生の投票で決まった優秀なグループのまとめはさらに洗練され、わかりやすい発表になっていた。このような経験を重ねることで自信を深めるプレゼンテ

ーションができることにつながると思われる。

個人のポートフォリオは、グループ内で同じテーマで各自が調べることで根拠は明確になった。しかし、レポートは個人作業であるので根拠と結び付けての論理性に乏しい学生がいた。特に疾病との結びつきが弱かったのは、病態学が未学習であるので今後学習が進むことで根拠を活かして考え、まとめることはできると思われる。

今回、グループワークを見守っていたチューターの教員も初めての体験であったが、回を重ねることやチューター研修に参加することで学生へのかかわりも変化したと推測できる。

6) 展開上の問題点の整理

(1)今回は、同じテーマをグループメンバーで調べてくることで、視野を広げることを目的としていたが、グループによっては分担して調べていた。メンバーが同じことを調べる意味や、教員の関り方にも影響を受けているので、チューターの研修を受けての参加によりグループワークへのかかわり方、見守るべきか介入すべきか、フィードバックもさらに効果的に行われる。

(2)遠隔会議にTVを使用したグループワークは、表情が見えにくい、操作に慣れないなどの課題があったので、今後使い慣れていくことやカメラの使い方には限度があることを理解した上でより効果的なグループワークができる工夫が必要である。

(3)PBLの学習は、一定の成果を得ることができたが、PBL以外にも効果的な学習展開ができる方法を探求することが今後の課題である。

7)担当者

キャリア発達論全体の責任者：水野敏子

1年次科目の責任者：山元由美子

科目担当者：山元由美子、水野敏子、佐藤紀子、下平唯子、伊東栄子、松寄英士、尾崎恭子、野副美樹(前半のみ)、菊池昭江、見城道子、服部真理子、ラウ優紀子、加藤京里、宗村弥生、山内典子

第1回 CDPBL 授業と NHR の実施スケジュール

平成 21 年 5 月 25 日

実施日：5 月 29 日(金)

9：10～ 9：40 CDPBL について(水野)

資料、USB 配布（学籍番号と名前記入）

学生は名札をつけて集合

9：40～ 9：50 教員紹介

9：50～10：00 休憩 場所移動

10：00～11：50 グループワーク

グループのテーマ,目標,進め方,ルール,を決める

提出物：記録用紙 1：キャリア発達論 I

CDPBL グループ別テーマと今後の予定

学生は指導教員を含め人数分＋1 部コピー

し一部提出

提出先：山元先生

12：00 部屋を整理して 食堂もしくはオーキッドホール集合

以降学生交流会委員が進める

16：00 大東キャンパス チャーターバスで出発

16：30 掛川駅着

16：50 掛川駅改札前に集合

17：05 JR 東海道新幹線こだま乗車

18：47 東京駅着 流れ解散

キャリア発達論 CDPBLの進め方（教員用）

I. キャリア発達論及びCDPBLの目的・目標

【キャリア発達論の学習目的】

1年生から4年次までの学習を通して、看護職としての自己目標を定め、広い領域でリーダーシップを発揮し、生涯研鑽を積むことができる基礎能力を養う。

【キャリア発達論1年次の学習目的】

先輩のキャリアを学び、看護師のキャリアについて具体的なイメージを持つことや、医学部との交流を通して協働についての態度を養い、これらを通してキャリアや協働についての基礎的能力を習得する。課題による取り組みでは課題解決能力の育成やフォローアップとしての参加能力を習得する。また、キャリア発達の基盤となるセルフケア能力や自己開発能力を身につける。

【CDPBLの4年間の学習目標】

- 1年次：グループワークのあり方について理解し、主体的に参加することができる。
- 2年次：フォロアーシップとしての役割について理解し、問題解決に向けた参加のあり方を習得することができる。
- 3年次：リーダーシップを滋養し、ファシリテーターとしての役割をとることができる。
- 4年次：問題解決に向けて参加する能力を習得し、チュータとしての役割を取ることができる。

【目 標】

- 1. グループワークに主体的に参加することができる。
 - 1) グループワークに主体的に取り組めるようグループワークに関するルールを遵守することができる。
 - 2) 自分の意見を相手に伝わるように話すことができる。
 - 3) 自分の意見は、少数意見であったとしても必ず発言することができる。
 - 4) 他者の意見に耳を傾けることができる（ただし、他者の意見を一方的に批判しない）。
- 2. 課題達成にむけて取り組むことができる

【メインテーマ】 現代社会における課題と対策

【学習方法】

- 1. グループでテーマ（別紙）を選択し、グループワークを主体的に進める。
- 2. 選択したテーマにおいて、解決すべき課題の発見、学習による知識の獲得、討論を通じた思考の深化、問題解決という過程を経た学習を行う。
- 3. 必要があればフィールドワークを行い、そこで生活している人々や働いている人々の活動などを通して学び（現状認識）を深める。
- 4. ポートフォリオを作成し、学習の記録を残す（詳細はポートフォリオの記載方法を参照）。
- 5. GW成果を発表し、プレゼンテーションの方法について学ぶと共に、テーマに関する討論を通して、

自己の学びを深める。

(1) グループワークで検討した内容については、示説（ポスター）にて発表する。

(2) 発表時にプレゼンテーション評価表を用いて、全員で評価する。

6. 凝縮ポートフォリオを各自で作成し、提出する。

【評 価】

1. 配点について CDPBL の配点は 40 点

①ポートフォリオ：凝縮ポートフォリオで評価し 10 点。

- ＜評価の視点＞
- (1)自分の考えが明確である
 - (2)エビデンスが必ず明記されている
 - (3)論理的でわかりやすい内容である
 - (4)役立つ提案である

②グループへの参加 評価の視点は学生の CDPBL 自己評価表に準ずる：25 点、出欠を含む。

以下の 5 項目について各々 4 段階評価（大変よくできた：4 点、よくできた：3 点、できた：2 点、努力が必要：1 点）とする（4 点×5 項目=20 点）。なお、学生自身の評価は評価の対象にはしないが、教員の個人の評価に活用する。

また、「CDPBL 全体を通して学んだこと」について学生が記載したものに対し評価を行う：5 点。

- (1)グループワークに主体的に参加することができる
- (2)グループワークに関するルールを遵守することができる
- (3)自分の意見が相手に伝わるように話すことができる
- (4)自分の意見は、少数意見であったとしても必ず発言することができる
- (5)他者の意見に耳を傾けることができる

③発表内容：全グループに 5 点

2. 評価の提出日時

①学生の提出：凝縮ポートフォリオと自己評価表の提出日は、10 月 13 日（火）17 時。

中間自己評価表は 7 月 10 日（金）16 時。

②教員による評価表は、10 月 22 日（木）山元のメールボックスに提出。

3. グループワークの発表の評価・・・学生が行う。

①発表用評価（学生）は、評価表は個人用とグループ用集計表と 15 グループの集計表を作成する。

②学生は個々に各グループの発表について一人が 100 点満点で点数（各項目 20 点）をつける。

- (1)現状分析は客観的に十分行われている
- (2)テーマと発表内容に一貫性がある
- (3)課題や対策が明確に述べられている
- (4)プレゼンテーションの方法は適切である
- (5)発表内容は興味を持てた

③各グループの代表者にグループの合計点と平均点（グループ人数が異なるため）を出してもらう。

④9 月 30 日に集計をする→各教員が担当グループの評価の計算を同日にする→全体の集計を科目担当者が行い、順位を決める。

- ⑤10月24・25日キャンパス祭(25日は学外向け)のときに発表(3題)してもらおう予定。各グループの発表時間は、検討する。ただし、準備があるので発表グループには事前に知らせる。

Ⅱ. テュータの役割と進め方

テュータとは 学習者(学生)が、主体となっていくグループおよび個人の学習を支援し、評価をする役割をとるものである。

グループや個人の学習が円滑に進行し、かつ到達目標が達成できるように助言者として同席する教員の名称で、1グループに1名任命される。

【テュータの役割】

テュートリアル主体は学生である。テュータはグループダイナミクスがスムーズにおこなわれるためのアドバイザーである。テュートリアル中の状況分析(討議されている内容、グループダイナミック)をし、必要に応じて助言する。

1. グループダイナミクスが円滑に運べるように注意する。グループワークの視点として、

- 1) 何でも話せる、聞いてもらえる、仲間やテュータに受け止めてもらえると学生が感じられる人間関係かどうか。
- 2) 活発な討論のための準備(自己学習)がなされているか。
- 3) 討論の論点が抽出された場合、学生のモチベーションになっているか。
- 4) ポジティブなフィードバックをする。
- 5) 一部の学生を支持するような言動は慎む。
- 6) テュートリアルに支障をきたす学生の欠席・遅刻に注意する。

2. 学生の学習を促進する。

- 1) 学生の実習内容の理解を深め、知識の統合を支援する。
- 2) 知識の伝授や単に答えを出すのではなく、学習方法に関する助言を積極的に行う(参考書やリソースパーソンの活用について)。
- 3) 学生の誤りを直接指摘や訂正などはしない。
- 4) 学習の方向がずれたり、重要なことが抜けたりしないように、討論が活発になるように刺激や助言をする。
- 5) 必要に応じて論点の整理をする。

3. 学生の評価(振り返り)

学生自身が自己の学習段階、傾向に気づき、努力目標が明確になるように振り返りをする。

【テュータの留意点】

- 1) 具体的なテュートリアルの運営は、学生の計画に従って行う。河田の教員の場合は、ネット会議を行う。学生専用の回線と看護学部全体の回線がある。ネット会議の場合は、学生の表情が画像で見られるように座る場所やカメラに配慮すること、発言者の意見が聞き取れるように調整をする。
- 2) 出欠は、グループワークの全て取る。
 - ① 学生が欠席した場合は、他の学生に今までの経過を説明させてスムーズに討論に参加できるよ

うに配慮する。

② 欠席者が出た場合は、他の学生が休んだ学生に、その回の内容と自己学習事項を責任を持って連絡させる。休んだ学生はできるだけ休んだ分を自己学習で補って次に臨むようにする。

③ 前回休んだ学生が出席した際、少しでも参加しやすいように配慮する。

3) 学生同士の議論が進むように、学生の発言を引き出すようにする。

4) ホワイトボード(模造紙)に記載することをすすめ、学生全員が進行状況を理解できるようにする。

5) 学生同士の意見が対立した場合は、事実にもとづいて討議がなされているかフィードバックをする。

6) 討議が進まない場合、素朴な疑問を引き出し、承認していく。

7) グループダイナミクスがうまくいかない場合、グループ討議の感想を述べさせ、メンバー間で協力していくための意識を高める。

8) テュータは進行上、方向性がわからなくなった場合は授業科目責任者に相談する。

9) 単位認定は、原則として授業科目担当者が行う。

10) テュータ欠席について

欠席の場合は、科目責任者に連絡をする。

科目責任者が教員の調整をする。

【テュートリアルステップ】

1 回目 グループ討議：問題点を出す

今後の計画を立てる（いつまでに、何をするか）

2 回目以降 グループの討議：学生の計画により随時実施

自己学習したものを持ち寄り討議する。

大東以外の担当教員はネット会議で参加

9月24日 発表内容のまとめ

10月30日 発表と質疑応答、自分のグループを含め他の発表グループの評価をする。

【CDPBL 学習記録方法 ポートフォリオへのかかわり】

ポートフォリオとは：意図的・経時的にファイルされた書類の束のこと

目的：①自分が行ったこと、考えたこと、感じたことなどを書き残し、振り返ることで多面的・多角的かつ長期的な視点で学びのプロセスや成長を評価する

②自己の課題を明確にして達成しようとするプロセスを通して自己教育力を高める

かかわり：①学生が自己の課題について整理ができないときや困ったときなどに、ポートフォリオや凝縮ポートフォリオを参考に問題を明確にする。

②ポートフォリオや凝縮ポートフォリオの作成ポイントは学生のオリエンテーション資料を参照。

【グループワークの具体的な進め方】

項目 時間配分	内容
場の設定 5分	名札をつけてもらう。
討議の導入 20分～30分	1) 課題の選択をする。 ・話し合いの上課題の選択をしているか観察する。 2) 課題について学生がメンバー間で討議がスムーズに行えるように示唆する。

	<p>例) 各自、課題をよく読んでください。 進行上何か問題がありますか。 グループで進めていくうえでわからない点がありますか</p> <p>3) 学生同士自由な発想が発言できるように示唆する。 ★ テュータは、最初から司会や書記を決めるように指示しない。</p> <p>例) 分からない点を出してみましょうか。 この課題からどんなことを学習できるか出してみませんか。 素朴な疑問を出すことからはじめてみませんか。 皆が意見を出し合えるようにしませんか。 Aさんが言ったように疑問を皆で出し合いましょう。 Bさんが言った内容でいいのではないのでしょうか 誰かが話し合いを進めていってくれる人がいるのでスムーズになるのではないのでしょうか。</p> <p>4) 出し合った話題が、メンバー全員に理解できるようにホワイトボードに記載する。 書かれた内容はホワイトボードでコピーをし、必要があれば全員にコピーを配布する。</p> <p>例) どんな内容があげられたかわかるようにしましょう。 せっかくホワイトボードがありますから記載し、皆で分かるようにしましょう。 書いてくれる人がいると今後の計画が立て易いのではないのでしょうか。 皆が共通認識できるようにホワイトボードに記載したほうがよいのでは？</p>
<p>論点の整理 15 分</p>	<p>5) 話題が出尽くした後に、論点の整理をする。 ★ 論点がずれている場合は、発言の価値を認めつつ方向づける。</p> <p>例) 皆十分に意見を出し合ったかしら、少しどのような内容がでたか整理してみたらどうかしら。 お互いに出し合ったのは情報不足かしら、これから学習していく点なのか整理するのはどうでしょうか。 (論点がずれている場合は、発言の少ない学生は論点のずれを客観的にみている場合がある。できるだけ、意見の少ない学生に述べられるような配慮をする) Aさんはあまり意見がないけど、どう考えていますか？ 今は何を中心に論じているのかしら。 Aさんが述べているのとBさんが述べていることは別かしら？</p>
<p>今後の計画 30 分</p>	<p>6) 今後の計画立案と次回の自己学習内容と日時が決定できるように示唆する。 ★ (役割分担など) 学習進行上の計画を提出させアドバイスをする。 役割分担とは教員との調整をするなどの連絡役などを言う。</p> <p>例) 9月の発表までにどうやって進めていきますか。 今後の時間は、皆で調べてきたことを、いかに自分の言葉で説明し、皆で情報を共有することが大切ですよ。 どのような計画をすすめるかグループメンバーの了解が大切ではないでしょうか。</p>

2 回目以降

項目 時間配分	内容
討議の導入 10 分	1)出欠をとる。 2)前回決めた学習課題を学生間で確認できるように示唆する。 ★学生が討論をしていく上で困っている場面を確認し、学生間で解決できないようなら話し合いの仕方の助言をする。 例)皆さんで立てた計画に沿って進めましょう 前はどのような計画で進めるようになっていたかしら？ 分担した内容を各自発表しあいましょう。 皆さんが理解できるように自分の言葉で説明したらどうでしょうか。 何か不明な点があったら、それを学習していくことに計画しましょう。 今日はどこまで話し合う予定ですか。 皆さんが決定した計画で進めてみましょう。 うまく進まないようであれば計画の修正が必要ではないかしら？
学 習 課 題 の 討 議 30 分	3)学生が課題の重要性を認識するように示唆する。 ★学習を深めていく上で必要性や課題の優先順位や討議を深めるような知識を選択できるようにする。 例)重要な意見を述べた学生に注目させる。Aさんが述べたい件はとても重要なことではないかしら。そのことについて調べてもよいかしらね。 ～についてみんなが気にしているところから学習を進めることが大切ではないかしら？
次回の計画立案 20 分	4)課題の学習不足に気づき、次回の学習が計画できるように示唆する。 例)よく調べてありますね。でも説明して疑問に感じたことはないかしら。 どうして～と考えたか説明してください。 少し学習の計画修正が必要になりましたか。 みんなで協力し合えば十分な学習ができることがわかったでしょう。 次回も綿密な計画を立案して実施しましょう。
まとめ 2 コマ	取り組んだ課題が他のグループメンバーにわかるようにまとめる。 課題、取り組み方法、問題点、提案をわかりやすく模造紙を用いてまとめる。

【学生との連絡について】

教員と学生との連絡は、面談、e-mail、遠隔システムを利用することになる。連絡のとり方については、担当教員が学生に指定のこと。なお、学生が e-mail を送受信する際には、ウィルス対策のため大東キャンパスおよび河田町キャンパス情報実習室内の PC を使用して送受信を行うよう説明してある。教員側も、ウィルス対策について徹底していただけるようお願いしたい。

グループワークのルール設定

- グループワークのルールとは、各グループで定めるグループ内での約束事である。
グループワークのルールを設定することで、連帯感を高め、責任感を持ってグループワークに継続的に参加してもらうのに役立つ。
- 言葉として表現することにより、自分の意思の確認をグループ全体のルールの共有化を促す。

- 1)グループワーク初回時（5月29日）に、CDPBL 記録用紙1において、グループワークのルールをまとめたシートを作成し提出させる。
- 2) 当たり前のことであっても、自分達で言葉に出して申し合わせをさせる。教員は、提出されたものに対し改善を求めたり、提案を行うことで、グループワークがスムーズに進行するように支援する。

例）・開始時間や終了時間の確認・約束

- ・欠席・遅刻時の連絡方法（原則として欠席は認めない）
- ・飲食物の持ち込み禁止
- ・グループで決めた学習課題は必ず取り組む
- ・学習課題の成果物の提出方法（紙にまとめて、人数分印刷してくる 等）
- ・自分の意見は、少数意見であったとしても必ず発言する

- 3) グループワークが進むにつれて、ルールについて悩んだ場合には、チュータに随時相談するよう伝える。
- 4) 7月10日（金）16：00までに、CDPBL 計画書（記録用紙2）を提出する際に、再度グループワークのルールを確認し、修正・提出してもらう。

キャリア発達論 I

CDPBLグループ別テーマと今後の予定

グループNo. _____

グループメンバー（グループの代表者は学籍番号の前に○印をつけて下さい）

学籍番号	氏 名	学籍番号	氏 名

1. グループワークのルールの設定

メンバーで、グループワークを行う際のルールを決めて下さい。例えば、「開始時間・終了時間を厳守する」「飲食物の持ち込み禁止」「自分の意見は、少数意見であったとしても必ず発言する」などです。

ルールを決める際には、グループメンバーの同意が得られたものについて書き、ルールを必ず遵守して下さい。また、グループワークを進めるうちに、ルールの遵守について悩んだ場合には、担当教員に随時相談して下さい。

<グループワークのルール>

☆私達は、以下のルールを遵守することに同意します。

グループで選択したテーマとその理由、目標、今後の予定を記入してください。

＜テーマ＞ _____

＜その理由＞

＜グループの目標（何をゴールとしたいのか）＞

＜今後の予定（グループとしていつまでに何をどうするのか具体的に）＞

キャリア発達論Ⅰ CDPBL計画書

_____ G グループメンバー _____

テーマ _____

1. 現状の分析

2. 課題の明確化

3. 今後の検討事項

(4. フィールドワークについて)

5. グループワークのルールの設定

メンバーで再度、グループワークを行う際のルールを確認し、必要があれば当初（5月29日）に決めたルールの修正をしてください。

ルールを決める際には、グループメンバーの同意が得られたものについて書き、ルールを必ず遵守して下さい。また、グループワークを進めるうちに、ルールの遵守について悩んだ場合には、担当教員に随時相談して下さい。

<グループワークのルール>

☆私達は、以下のルールを遵守することに同意します。

CDPBL教員評価表

グループ:

学籍番号

学生氏名

評価目標	評価	評価の根拠
1 グループワークに主体的に参加することができる		
2 グループワークに関するルールを遵守することができる		
3 自分の意見が相手に伝わるように話すことができる		
4 自分の意見は少数意見であつたとしても必ず発言することができる		
5 他者の意見に耳を傾けることができる		
CDPBL全体を通しての評価		
総合評価		

評価 A : 4点(大変よくできた)
B : 3点(よくできた)

C : 2点(できた)
D : 1点(努力が必要)

CDPBL自己評価表

グループ:

学籍番号

学生氏名

評価目標		評価	評価の根拠
1	グループワークに主体的に参加することができる		
2	グループワークに関するルールを遵守することができる		
3	自分の意見が相手に伝わるように話すことができる		
4	自分の意見は少数意見であつたとしても必ず発言することができる		
5	他者の意見に耳を傾けることができる		
CDPBL全体を通して学んだこと			
総合評価			

評価 A : 大変よくできた
B : よくできた

C : できた
D : 努力が必要

CDPBL発表会用評価表

グループ:

学籍番号:

氏名:

担当教員:

グループ	(1)現状分析は客観的に十分行われている (20点)	(2)テーマと発表内容に一貫性がある (20点)	(3)課題や対策が明確に述べられている (20点)	(4)プレゼンテーションの方法は適切である (20点)	(5)発表内容は興味を持たせた (20点)	合計点数 (100点)
1						
2						
3						
4						
5						
6						
7						
8						
9						
10						
11						
12						
13						
14						
15						

<メモ>

5. 看護学部キャリアセミナー

5-1 平成 20 年度 看護学部キャリアセミナー

1) 目的

看護学部を卒業すると、看護師、保健師、助産師、養護教諭など多様な資格を活かし、そして病院、保健所・保健センター、企業、学校といった多岐に渡る場で活躍することが可能である。それ故、看護学部に入學し、各専門領域の看護学を学ぶにつれて、近い将来、「どの職種に就けばよいのか」、「大学病院と専門病院のどちらが自身の望む看護ができるのか」などといったキャリアの選択に苦慮し、さらに、卒業後に「こんなはずではなかった」というリアリティーショックに苛まれる学生も多く見受けられる。

そこで、看護学部生が、卒業時までにはキャリアプランを持つことができ、かつ、女性医療人として生涯に渡りキャリアデザインを構築していくための一助となることを目指し、身近なモデルとなる先輩医療者との、キャリア設計についてのセミナーを開催した。

2) 方法

看護師・助産師・保健師として様々な資格を生かし、多方面で活躍している本学部卒業生 4 名を講師に招き、キャリアセミナーを開催した。

セミナーの内容は、各講師の現在の自己のキャリアについて約 20 分で語ってもらった後、学部生がさらに話を聞きたい先輩のグループに分けて、フリーディスカッション形式のグループワークを約 30 分行った。

3) 実施

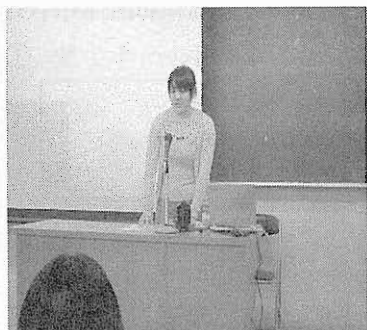
(1) 日 時：平成 21 年 3 月 12 日（木） 14 時 30 分～16 時 30 分

(2) 場 所：東京女子医科大学看護学部第 1 校舎 123 教室

(3) 参加者：当日の参加者は 65 名で、その内訳は、2 年生 22 名、3 年生 13 名、4 年生 16 名、卒業生 1 名、教員 13 名であった。

(4) セミナー講師および講義概要

①山本響子さん（東京女子医科大学病院 看護師）



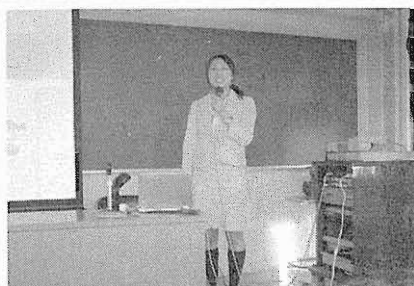
看護師を目指した経緯、大学生活について、大学病院のシステムについて、クリティカルケア看護について、国家試験の勉強法などについて講義していただいた。

② 岡野恵子さん（よみうりランド慶友病院 看護師）



看護師を目指した経緯、施設の概要、高齢者看護について、結婚後のキャリアなどについて講義していただいた。

③澤田郁美さん（掛川市保健予防課 保健師）



保健師を目指した経緯、保健師活動の紹介、掛川市での生活、国家試験の勉強法、公務員試験の勉強法などについて、掛川市の写真を織りまぜながら講義していただいた。

④西山実里さん（東京女子医科大学病院 助産師）



助産師を目指した経緯、大学病院について、母子センターについて、助産師の仕事について、国家試験の勉強法などについて、母子センター内の写真を織りまぜながら講義していただいた。

(5) グループワークについて

講義内容を補足していただきながら、学生が自由に先輩に質問していく形で進んでいった。学生の主な質問内容としては、「業務内容の詳細」「仕事へのやりがい」「勤務体系」「給与および福利厚生」などであった。



4) 評価・効果

セミナーに関するアンケート結果 参加人数 65 名中 回収 35 名 (回収率 53.8%)

(1) キャリアセミナーについて

① セミナーの講義はいかがでしたか。

- | |
|---|
| 1. 適切だった … 35 名 (100%)
・ 視覚的な刺激があると良い。 |
| 2. 他の形式がよかった … 0 名 |

② セミナーの懇話会はいかがでしたか。

- | |
|-------------------------|
| 1. 適切だった … 25 名 (71.4%) |
| 2. 他の形式がよかった … 0 名 |
| NA … 10 名 |

③ セミナーの所要時間はいかがでしたか。

- | |
|---|
| 1. 短かった … 1 名 (2.9%) : 時間の記入なし |
| 2. ちょうどよかった … 29 名 (82.9%) |
| 3. 長かった … 4 名 (11.4%) : 1 時間で十分…1 名, 1 時間半で十分…1 名
・ 設定通りで良いと思うが開始や終了が遅くなったため時間通りにできると良い。
・ 4 人でなくても良かったのではないかな
・ 講義以上に話し・質問などの時間を設けて欲しかった。 |
| NA … 1 名 |

④ セミナーの開催時期はいかがでしたか。

- | |
|--|
| 1. 適切だった … 29 名 (82.9%) |
| 2. 他の時期がよい … 5 名 (14.3%)
(希望時期 : ①入学してすぐ ②3 年次 ③4 年になってすぐ ④4 年次の 10 月頃
⑤授業が平常にあるとき)
・ 卒業式の前日だと、次の日の準備など家が遠いと講義を最後まで聞けない人もいます。 |
| NA … 1 名 |

(2) キャリアセミナーについての感想

- ◆短い時間であったが、貴重な話を聞くことができた。
- ◆いろいろなキャリアを持った方から、学び多きお言葉をいただいた。
- ◆改めて自分の看護師像や、看護観を考えるきっかけとなった。

- ◆精神看護に興味があるが、実習だけでは自分が働くイメージがわからないので、次回は、精神専門病院に就職された先輩の話を聞きたい。
- ◆臨床の人の声は、直接聞く機会がないので、今回のセミナーで様々な職種、職場で働く先輩の話を聞くことができ大満足である。
- ◆実際に働いてからの様子を聞いて、将来に対するモチベーションを高めることができた。これを期に、自分がどうしたいのかを考え、少しずつ行動に移していきたい。
- ◆女子医大だけでなく、他の医療機関に勤めている方のお話を聞きたい。
- ◆今まで女子医大に就職しようか悩んでいたが、先輩から話を聞いたことで、女子医大に興味を持つことができた。
- ◆これから就職するにあたって不安を抱いているが、先輩のお話を聞くことで少しその不安が和らいだ。
- ◆学部の先輩の話だったので、親しみやすく分かりやすかった。また、自分の不安であったことや聞きたかったことがわかり、求めていた答えが返ってきてうれしかった。
- ◆将来について、漠然とした不安があったが、考えすぎなくてもよいと分かり、気が楽になった。
- ◆講義以上に、質問などを聞ける時間がもっと欲しかった。
- ◆将来のことについて、もっと考えたい。仕事のない時には、自分の好きなことをどんどんやっていきたいと思う。
- ◆看護師、保健師、助産師の各職種の話を聞いて、将来が見えてきた気がする。
- ◆働くにあたり、どの方も仕事に対してやりがい、楽しいと思えるところを持っていると思った。また、なぜ自分が看護師になりたかったなどの、初心がモチベーションにつながるのではないかと感じた。
- ◆先輩方がとても楽しそうに話していらっしゃったので、仕事を楽しんでいるんだなど感じ参考になった。また、このような機会を設けて欲しい。
- ◆いろいろな場で働く先輩方の話を聞けて、視野が広がった。
- ◆看護師だけでなく、保健師にも興味があったので、どのような仕事をしているのか分かってよかった。
- ◆全体での質疑応答があればよかった。
- ◆その職業について話してもらうのか、それともその卒業生のキャリアについて話してもらうのか曖昧であった。
- ◆働くことが楽しみになった。
- ◆卒業生達が、自分の言葉でいきいきと仕事について語っている姿に感動した。学生にとってもよい刺激とエールになったと思う。様々な職場で働いている講師の選択もよかった。
- ◆先輩達がとてもきらきらしていて素敵であった。
- ◆自分が今、持っている悩みを働いている先輩達も同じように持っていることに安心し

た。

- ◆助産師の先輩と話して、より一層、助産師になりたい気持ちが強まった。もっと先輩の話聞ける機会が欲しい。
- ◆楽しそうに活躍されていることが伺えてよかった。

5) 展開上の問題の整理

今回、看護学部が開催したキャリアセミナーにおいて、学部卒業生から話を聞く機会を得ることで、看護学部生においては、自分の将来像や看護観を考えるきっかけとなり、将来についての不安が軽減され、キャリアに対するモチベーションを高めることにつながっていた。特に、2・3年生は、将来の職種や看護職像についてイメージすることにつながり、また、4年生では就職に向けての漠然とした不安の解消につなげていたというように、やはり学年によって求めることが異なっていた。

次年度は、引き続き多様な資格を持って活躍し、かつ女子医大系列病院だけでなく、民間の医療機関や専門病院で活躍する卒業生を招き、特に低学年の学生が、将来のキャリア設計にむけて、学習に意欲を持って取り組むことができるようになることを目標にセミナーを実施していきたい。

5-2 平成 21 年度 看護学部キャリアセミナー

1) 目的

平成 20 年度に引き続き、看護学部生が、卒業時までにキャリアプランを持つことができ、かつ、女性医療人として生涯に渡りキャリアデザインを構築していくための一助となることを目指し、身近なモデルとなる先輩医療者との、キャリア設計についてのセミナーを開催した。

2) 方法

様々な資格を生かし、多方面で活躍している本学部卒業生 4 名を講師に招き、キャリアセミナーを開催した。講師の選定にあたり、平成 20 年度に開催したセミナーによせられた学生の意見を反映し東京女子医科大学関連病院で働く講師および、専門性の高い精神看護領域で働く講師を依頼した。また、本学は、平成 22 年度に養護教諭 1 種免許取得者第 1 期生を輩出するため、看護師・助産師・保健師に加え養護教諭として働く講師をお招きした。

セミナーの内容は、各講師の現在の自己のキャリアについて約 20 分で語ってもらった後、学部生がさらに話を聞きたい先輩のグループに分けて、フリーディスカッション形式のグループワークを約 40 分行った。

3) 実施

(1) 日 時：平成 22 年 2 月 16 日（火）13 時 30 分～16 時 00 分

(2) 場 所：東京女子医科大学看護学部第 1 校舎 123 教室

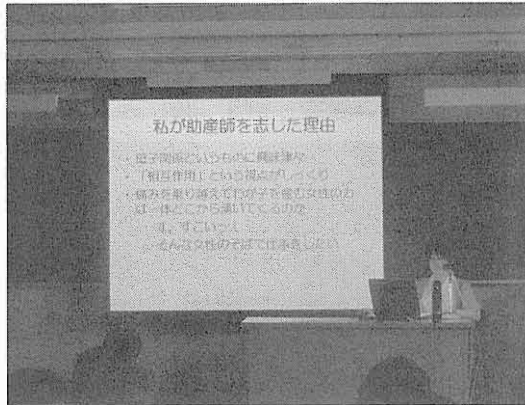
(3) 参加者：当日の参加者は 45 名であった。その内訳は、学生 29 名（2 年生：9 名、3 年生 19 名、4 年生 1 名）、教員：16 名であった。

(4) セミナー講師および講義概要

①看護師 遠山 梓 さん 長谷川病院 CNS



②助産師 沼田 彩 さん 東京女子医大病院



③保健師 横田有香 さん 静岡県御前崎市保健師



④養護教諭 斉藤知美 さん 共立女子第二中学高等学校



(5) グループワークについて

講義内容を補足していただきながら、学生が自由に先輩に質問していく形で進んでいった。学生の主な質問内容としては、「業務内容の詳細」「仕事へのやりがい」「就職活動」「就職試験対策」などであった。



4) 評価・効果

当日の参加者は45名であった。その内訳は、学生29名（2年生：9名、3年生19名、4年生1名）、教員：16名であった。なお、アンケート結果は、以下の通りである。アンケート回収28名（96.6%：学生の参加での割合）、2年生：9名（100%）、3年生：18名（94.7%）、4年生：1名（100%）、教員1名。

- 1) 今回のセミナーに参加したことで、将来の職業選択のイメージがつけましたか。

イメージがついた 27名（96.4%）

つかなかった 1名（3年生）（理由：まだ迷っているため）

- 2) 本セミナーは、就職後の不安解消に役立つ内容でしたか。

役立つと思った 27名（96.4%）

思わなかった 1名（3年生）

（理由：「辞めたいと思った」という発言から、逆に不安になった）

- 3) 今回のセミナーは、期待していた内容でしたか。

はい 27名（96.4%）

いいえ 1名（2年生）

（理由：聞きたかった内容の話がでなかった）

- 4) 今回のセミナーに参加して良かったですか。

はい 27名（96.4%）

・仕事ぶりを生の声で聞くことができてよかった、いろいろな職種の話が聞けた
（2年生）

・先輩の話を詳しく聞けてよかった、具体的な話が聞けた、就職後の話が聞けた、
実習だけでは分からない面が分かった、看護師以外にも興味をもてた、将来を考えら
れた、精神科の看護師？（以上、3年生）

いいえ 0名 無回答 1名（0.04%）

- 5) セミナーの懇話会はいかがでしたか。

適切だった 18名（64.3%）

他の形式がよかった 0名 無回答 10名（35.7%）

- 6) ① セミナーの所要時間はいかがでしたか。

短かった：0名 ちょうどよかった：24名（85.7%） 長かった：2名

（0.07%） 無回答：2名

② 講演の時間はいかがでしたか。

短かった：0名 ちょうどよかった：25名（89.3%）
長かった：1名（0.04%） 無回答：2名

③ 懇話会の時間はいかがでしたか。

5) 懇話会に関する問いが無回答の10名中9名は無回答
短かった：0名 ちょうどよかった：18名（64.3%）
長かった：0名 無回答：10名

7) セミナーの開催時期はいかがでしたか。

適切だった 23名（82.1%）

他の時期がよい 2名（0.07%） 無回答 3名（0.11%）

*希望する時期：テスト期間を外して欲しい（2年生）、国試直前でなければ4年生が参加できる（4年生）、夏休みでも良いかも…、もう少し早いともっと進路について深く考えられる（3年生）

セミナーに関する自由記載（感想・意見）

*各意見の後ろの数字は学年を示す

◎ 看護職のイメージをもつことができた。将来の職業選択に役立てられそう。

- ・実際の現場の話を聞くことができ、具体的なイメージを持つ機会となった（2）。
- ・卒後のことが考えられた（3）。
- ・就職にぜひ、役立てたいと思った（3）。
- ・将来、自分の進路を決める際にとっても参考になると思う。将来を考える上で、とても参考になった（2）。
- ・講師それぞれの就業理由や病院選択の理由が聞けて良かった（2）。

◎ 自分の将来を考えるきっかけとなった。

- ・将来を考えるきっかけとなった（3）。
- ・いろいろな看護職に新たな興味が湧き、進路に迷う（2）。
- ・看護師以外の職業にも興味をもて、自分の進路について考えることができた（3）。
- ・今回のセミナーを機会に、自分がどの分野に向いているのか考えていきたい（4）。
- ・助産師さんのDVDに感動した（2）。

◎ 参加姿勢について <聞きたいことを聞くことができた>

- ・授業や全員参加とは違い、参加者希望制のため、聞きたいことがきちんと聞けた（2）。

◎ 要望 <全部の職種の話が聞きたかった。一般的な話も聞きたかった>

- ・1つの職種に限らず、少しずつ質問できる形式がよかったように思う（2）。

- ・一般的な領域の看護師の話も聞いてみたかった。精神科の看護師の話も参考となったが、少し特殊な感じがした (3)。

5) 展開上の問題の整理

今年度は特に、養護教諭課程を履修している 3 年生の学生が多く参加しており、学生のニーズに合った講師の選定ができたと考える。また、2 年生は様々な資格を持つ先輩の話を満遍なく聞けることになり、今後の職業選択、自身の将来についてイメージ化することができたようであるが、参加者が少なかったのは残念であった。

平成 20 年、21 年と開催したことで、新 3・4 年生にはセミナー内容について周知されたため、次年度は、主な対象者を新 2 年生に絞り、引き続き多様な資格を持って活躍する卒業生を招き、将来のキャリア設計にむけて、学習に意欲を持って取り組むことができるようになることを目標にセミナーを実施していきたい。

執筆者一覧

はじめに	医 学 部 長 大澤真木子 看護学部長 久米美代子
第1章 本取り組みの概要と経過	医学教育学 吉岡俊正
第2章 医学部の取り組み	人間関係教育委員長 齋藤加代子
1. ロールモデル育成教育	
1-1 実習名:女性医師ロールモデル実習	岩崎直子
1-2 実習名:先輩と語る	岡田みどり
2. キャリアビジョン育成教育	
2-1 実習名:院内奉仕学習実習	岡田みどり
2-2 実習名:乳幼児施設実習、院内保育所実習	岡田みどり、三原祥子
2-3 実習名:高齢者施設実習	田口啓子、岡田みどり
3. 協働を見据えた自己のキャリア構築	
3-1 実習名:チーム医療入門実習	野田小枝子
3-2 実習名:看護の医療対話実習	岡田みどり
第3章 医学部・看護学部協働教育の取り組み	
1. キャリア発達論 I 医学部・看護学部協働教育	
1-1 看護技術演習	菊池昭江
1-2 ミニ・デュートリアル	菊池昭江
2. 医学部・看護学部協働教育(合同カンファレンス)	日沼千尋
3. 医学部・看護学部合同解剖慰霊祭実習	
ー亡くなられた方から学ぶ医学・看護学ー	日沼千尋
第4章 看護学部の取り組み	
1. GP委員会取り組み経過	
1-1 看護学部の取り組み経過	水野敏子
1-2 平成20年度の取り組み	水野敏子
1-3 平成21年度の取り組み	水野敏子
2. キャリア発達論 I キャリアイメージング教育	山元由美子
3. キャリア発達論 I 食のフォーラムと調理実習	
3-1 栄養士による食のフォーラム	伊東栄子
3-2 栄養士による調理実習	伊東栄子
4. キャリア発達論 I キャリア発達問題解決学習(CDPBL:Career Development Problem-based Learning)の取り組み	山元由美子
5. 看護学部キャリアセミナー	
5-1 平成20年度 看護学部キャリアセミナー	中田晴美
5-2 平成21年度 看護学部キャリアセミナー	中田晴美